

# 高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書

1987

高槻城跡遺跡調査会

# 高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書

1987

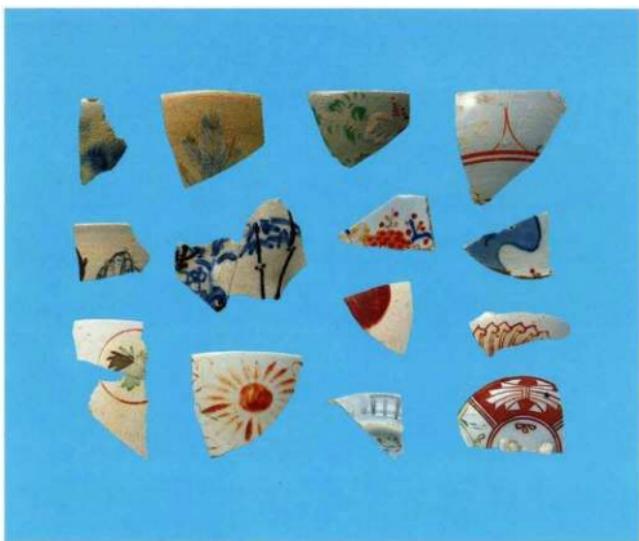
高槻城跡遺跡調査会



調査区全景（北西から）



溝2 埋土の状況



三ノ丸跡出土 安南染付・京焼色絵・伊万里色絵



三ノ丸跡出土 明白磁・伊万里白磁



祥瑞写 盂台 (1)

高さ 5.0cm

祥瑞写 酒杯 (2)

高さ 4.1cm



高台内染付銘 (1)

共箱銘 (1)



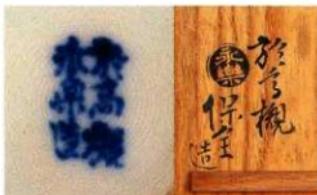
祥瑞写 丸紋瓢型捻酒次 (3)

高さ 17.4cm



高台内染付銘 (2)

共箱銘 (2)



高台内染付銘 (3)

共箱銘 (3)



典須赤画金入紅紫小鉢 (4)

高さ 6.6cm 同左、底面

永樂・印



魁 典須赤絵丹鉢 (5) 高さ 7.0cm

下、底面 永樂・印



共箱銘 (4) 表



共箱銘 (5)

## はしがき

高槻城跡は、芥川が形成した扇状地の中央部末端に位置し、東西600m南北600mの規模を有する広大な遺跡であります。中世には高山右近が拠り、近世には内藤信正をはじめとして、あと永井氏がながらく領主をつとめたことでしられています。ところが明治七年には、鉄道建設による資材調達のため、破却されることになり、約300年間にわたった高槻城の歴史がとじられることになりました。戦後は、市街化が進み、高槻城のおもかげも急速に失われつつありますが、最近では、城跡公園の整備などで史蹟としてよみがえってきたところであります。

このたび、高槻城三ノ丸跡の一画に、大阪府法務局高槻出張所の新築が計画されたので、その事前調査として発掘を実施しました。

高槻城では、昭和50年に本丸跡の発掘調査がおこなわれて、石垣基礎を発見するなど、多大な成果がおさめられています。このたびの調査でも、はじめて高山右近城主時代の堀跡が発見されたり、近世高槻城の外堀も検出いたしました。また、多くの陶磁器が出土し、江戸時代の高槻城の生活ぶりが想像できるようになるなど、多くの成果をおさめることができました。本調査の成果が今後の城郭研究に少しでも役立つならば幸いに存じます。

なお、調査並びに本報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心から深く感謝の意を表します。

昭和62年2月28日

高槻城跡遺跡調査会

理事長　　戴　　重　彦

## 例　　言

1. 本書は、高槻城跡遺跡調査会が高槻市城内町1498-6番地で実施した高槻城三ノ丸跡の発掘調査概要報告書である。
2. 事業は、大阪法務局の委託を受け、昭和61年8月26日～昭和62年3月20日の期間で、総事業費11,999,820円として実施した。
3. 調査は、調査員森田克行が担当し、昭和61年9月1日着手、61年11月7日完了した。
4. 調査会は大阪法務局・大阪府教育委員会・高槻市教育委員会等の担当職員並びに学術研究者らで構成し、事業をおこなった。

## 高槻城跡遺跡調査会

理 事 長 戴 重彦 高槻市教育委員会教育長  
理 事 原口 正三 高槻市文化財保護審議会委員  
　　　　田代 克己 帝塚山短期大学教授  
　　　　久徳 繁雄 大阪法務局総務部会計課當舡係長  
　　　　堀江 門也 大阪府教育委員会文化財保護課記念物係長  
　　　　橋長 勉 高槻市教育委員会社会教育部長  
監 事 足立 晴一 高槻市教育委員会管理部長  
　　　　井出 正夫 高槻市教育委員会管理部次長  
調査部長  
兼調査課長 富成 哲也 高槻市立埋蔵文化財調査センター所長  
調査員 森田 克行 高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員  
　　　　宮崎 康雄 高槻市立埋蔵文化財調査センター文化財専門員  
事務部長 西阪 弘 高槻市教育委員会社会教育部次長  
事務課長 杉本 秀一 高槻市教育委員会社会教育部社会教育課長  
事務員 入江 淳 高槻市立埋蔵文化財調査センター事務吏員  
　　　　白銀 良子

5. 出土木材の樹種鑑定については、京都大学木材研究所・島地謙、林昭三氏、螢光X線分析については、奈良教育大学教授・三辻利一氏、花粉分析については、大阪府立三島高校教諭・徳丸始朗氏に委託し、報告をいただいた。

6. 本書の作成は調査員森田克行がおこなった。遺物の整理・資料の実見にあたっては、下記の方々のお世話をになりました。

大船孝弘、橋本久和、鐘ヶ江一朗、北原治、恵谷英俊、武村雅一、後藤勇子、三辻利一、島地謙、林昭三、徳丸始朗、富井康夫、渡辺誠、鈴木重治、森村健一、船木佳代子、楽吉左衛門、奥井哲秀、戸重孝、郡邦辰、滴翠美術館、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、木村省吾、梶山彦太郎（順不同）

なお、第2部の作成は高槻市立埋蔵文化財調査センター職員 橋本久和がおこなった。

7. 調査の実施にあたり、大阪法務局総務部会計課営繕係 池上 進氏の援助をいただいた。記して感謝の意を表します。

## 目 次

### 第1部 高櫻城三ノ丸跡発掘調査概要

第1章	はじめに	1
第2章	調査の概要	3
1.	調査の経過	3
2.	遺構	3
3.	遺物	7
4.	三ノ丸跡外堀の花粉分析	18
5.	三ノ丸跡出土木材の樹種	25
6.	三ノ丸跡出土の金属製品およびガラスの材質分析	30
第3章	まとめ	34

### 第2部 高櫻城城郭跡発掘調査概要

第1章	はじめに	1
第2章	調査の概要	1
1.	遺構	1
2.	遺物	5
第3章	まとめ	8

# 第1部

## 高槻城三ノ丸跡発掘調査概要



# 第1章 はじめに

高槻城跡は、高槻市の中央部を南流する芥川が形成した扇状地の中央部末端に位置し、西方0.8kmに芥川、東方1.6kmに檜尾川があり、また城地の南方にある淀川までは幅3kmにわたって氾濫平野がひろがっている（挿図1）。かつては城地から淀川の対岸にある生駒山麓の村々や大阪湾までも見渡せたという。現在城跡の中心部は府立島上高校・市立第一中学校・市民グランド・市民会館・市民プールなどで占められているが、最近では堀跡を中心に宅地開発がすすみ城址の景観が急速に失われつつある（図版第1）。そのなかにあって昭和50年には本丸跡の発掘調査がおこなわれ、石垣基礎の胴木組などが発見されたことは記憶にあたらしい。そしてその調査成果は、高槻城の顕彰のみならず城郭の研究においても寄与したところである。<sup>①</sup>

さて高槻城の立地する芥川扇状地には、古くから集落がいとなまれ、高槻城跡の調査でも弥生土器や須恵器が出土しているし、北西約200mにある上田部遺跡でも弥生時代から奈良時代にいたる遺構・遺物を検出している。とりわけ上田部遺跡での奈良時代の資料については顕著なものがある。平安時代以降になると、いくらかの遺物は得られているものの明確な遺構はつかめておらず、ひきつづいて構築される高槻城も、その初源形態などはあきらかでない。



挿図1 高槻城とその周辺（明治18年）

高櫻城の沿革については古代末にまでさかのばるとする伝承もあるが、史料のよりどころとしては中世後半の入江氏の所伝が確かなものであり、「高櫻城」の史料の初見も大永七年(1527)の『高櫻入江城』として登場する。しかし高櫻城が歴史の表舞台にててくるのは、永禄十一年(1568)の織田信長摂津侵攻以後の和田・高山氏時代である。とりわけキリシタン大名高山右近の在城時期が顕著で、広大な城郭が修築されたといわれている。その後しばらくは大きな改修もなく維持されてきたが、大坂夏の陣後の元和三年(1617)公儀修築により近世城郭としてうまれかわることになる。このときの修築は元和六年の大坂城改築にむけての布石のひとつとしての新城建設であり、その背景には藤堂高虎の差配がかんがえられるなど、歴史上高櫻城の存在価値がもっとも高くなったときである。いまわれわれが目にする城址や城下町の面影は、まさにこの近世高櫻城の賜物である。ところが明治七年(1874)さしもの高櫻城も富国強兵政策のなか、京阪間鉄道建設に際し石材調達のため破却され、同四十二年には工兵隊が駐屯、城地の大半が占地されることになった。戦後、工兵隊跡地は各種学校用地として利用されたのをはじめとして、公共施設がたちならび現在にいたっている。

中世の高櫻城の規模については、若干の遺構・遺物を検出しているが、その解明は緒についたばかりである。

近世高櫻城については、「高櫻城絵図」が現存し、またいまにみる町割りの様子からも全体像をうかがうことができる。すなわち城の形態は連郭式で、中心に本丸・二ノ丸をおき、東側に東郭、南側に弁財天郭を細長く配して内郭とし、外郭は帯郭、蔵屋敷、三ノ丸の3郭からなり、内郭をとりかこんでいる。そして最外郭にあたる出丸が城地の西辺にあって、南北に細長く設けられている。城の範囲は南北約630m、東西約510mで、北側中央がすこし突き出た凸字形を呈しており、規模のおおよそを知ることができる。ところがその実態となると、遺跡化したいまでは発掘調査する以外に知るすべはなく、不明な事柄が多々あるのはしかたないことかもしれない。この点については、本丸跡の調査成果が如実にしめすところである。

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査の経過

今回の調査は高槻城三ノ丸跡の東北部と考えられるところに大阪法務局高槻出張所が建設されることになり、その事前調査として実施したものである（挿図2）。調査面積は1500m<sup>2</sup>であるが、北半分が城の外堀に対応するため、調査は南側と北側の2回にわけておこない、北側については遺構の性格上危険がともなうため限局的なものとなった。調査の結果、中世後半～近世にいたる高槻城の遺構・遺物を検出した。

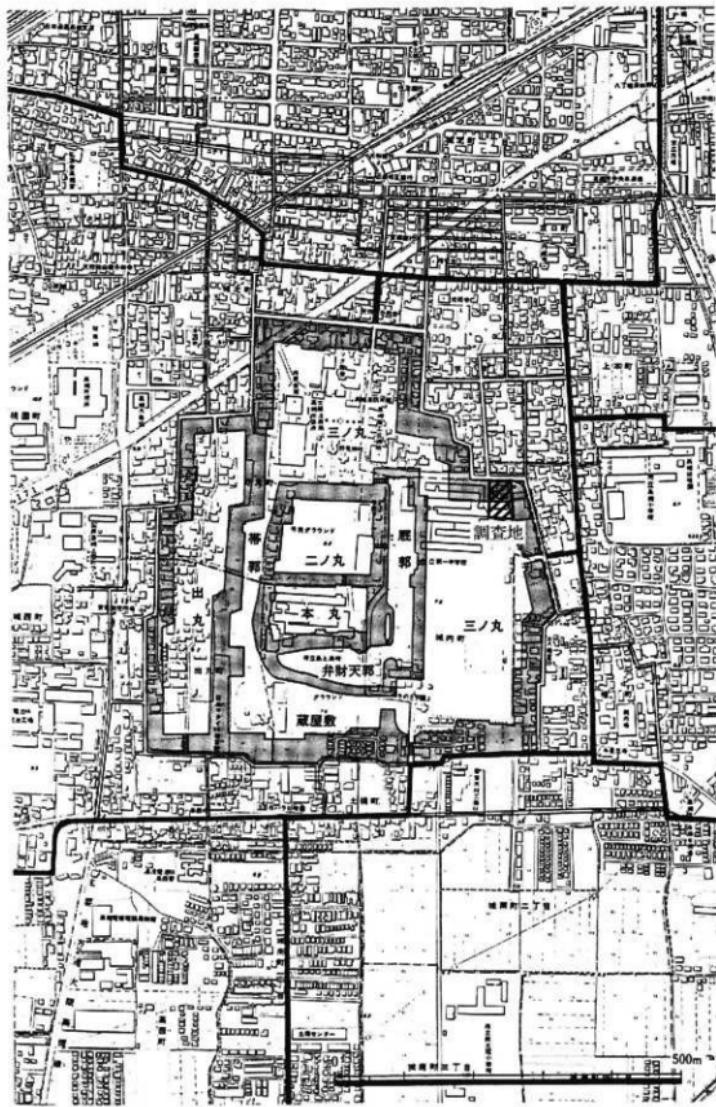
遺構面の標高は中世で約6.5m、近世で約7mである。

### 2. 遺構

中世では溝2条のみの検出であるが、近世では高槻城三ノ丸の東北角を確認するとともに、外堀を調査し、杭列・横木からなる護岸施設を検出した。また廃城後の遺構として、落ち込み・井戸・暗渠がある（図版第2～12・35～40）。

中世の溝1は、調査区の南半部で東西方向に検出した（図版第4b）。幅2.6m、深さ1mで、長さ21.6mを測る筋掘りの溝である。溝の北側には2ヶ所で土壙状の掘り込み（幅1.8m、長さ1.5m、深さ0.3m程度）が付設されており、その間隔は8mになっている。反対の南側では東半分の肩部に沿って径10cm前後の丸太杭が8mにわたって19本うちこまれていた。この杭列は整然としたものではなく、両邊に群在する傾向がつよい。埋土は暗灰色粘質土と暗灰色砂礫を主としている。なお溝1は、断面図（図版第36-左下）にしめすように、上縁部が後世の掘り込みによって削平されていることから、当初はもうすこし深くて1.5m程度、また幅も3m程度あったとかんがえられる。遺物としては中層から出土した石仏・漆器椀片があり、そのほか須恵器片・弥生土器片が混入している。

溝2は調査区の南端部で東西方向に検出した（図版第4b）。溝1とはほぼ平行しているが、南肩部は調査区域外になるため、溝幅はあきらかでない。断面図から復元すれば約7～8mになろうか。深さは1.5mあり、溝底は中央部がやや高くて、東西両端では東側がわずかに低くなっている。溝の西端部以西について北側へ曲折しているのが確かめられたが、東端部は途切れしており、溝がおわるか、もしくは南側へ屈曲するものとおもわれる（図版第37）。なお溝2は、



挿図2 調査位置図

下層以外の埋土が人頭大のブロック（土塊）で充填されていることから、一定期間機能したのち一気に埋められたことが判明した（図版第36—右下、5 a・b、口絵1一下）が、その埋土と同じ土層は溝2の肩部からさらに0.7mの高さまで達し、盛土をも兼ねていることがあきらかになった（図版第36—西壁・東壁断面図）。そしてこの土塊は近世高槻城の外堀掘削面にみられる堆積土層（地山）と同じ暗灰色粘質土や青灰色砂質土を主体とすることから推すと、溝2は元和三年の高槻城修築に際しておこなわれた外堀の掘削と三ノ丸の造成にともなって埋められたとかんがえられる。

近世高槻城の造構としては、三ノ丸北側の外堀と東側の外堀の一部が検出できたが、土塁や築地塀など城郭の構造物は後世の削平をうけていて検出できなかった。

北側の外堀は南肩が長さ23mにわたって検出され、斜面部は5～6段の杭列と横木によって護岸されていた（図版第7）。杭列は原則的に各段が平行になっているが、中途で途切れたり食い違っているところがあり、長いものでは10m程度、短いのは3m位が一直線状になっている（図版第35）。杭は径5～10cm・長さ2mほどの丸太杭で、頭部をすこし岸側に傾けて、約0.5mの間隔でうちこまれている（図版第12a）。検出した杭の総数は439本である。杭の多くは横木の打ち止め用であるが、なかには横木の下から検出されるものもある。横木については南肩部では部分的にしか検出できなかった。横木材としては木の枝あるいは枝を打ち払っただけの丸太、さらには角材などの加工木もみられ、難多なものをちいしている。規模も大小さまざままで、大きいものでは長さ4～5mを測り、太さも最大0.6mのものがある。また横木の多くは堀の埋積土中にあって地山面（堀の斜面部）から逆離して検出されており、この護岸工事が外堀掘削当初のものではなく、一定期間を経たのちに施工されたことをしめしている。しかもほぞ穴のある角材などもみられ、その下からは漆喰壁の一部が出土するなど、築地塀の補修までもふくめた外堀の改修工事であったとかんがえられる。

調査区の北東部では郭のコーナー部分を検出し、南へ屈曲する外堀も確認された。コーナー部分では、杭列が8段にわたってもうけられていて、より堅固に補強されていた（図版第8）。なお北堀と東堀のなす平面角度は115度とやや鈍角になっている。また東南部の拡張部（図版第10b・37）でも護岸施設が検出され、補修工事が外堀全面にわたっておこなわれたことがうかがえる。北側の外堀の幅は、北の肩部が検出できなかつたためあきらかでないが、埋土の状況から判断すると約35mになる。堀の郭側斜面はゆるやかな傾斜をもって段状に掘削されていて、形態的には築研堀に近いものとかんがえられる。西壁断面図（図版第36）をみると、斜面中位での傾斜は約27度となっているが、上端近くでは19度とゆるくなっている。ちなみに、コーナー部や東堀の断面図（図版第37・39）にみられる上端部での傾斜をみると、北堀にあたるA

—A'ラインでは18度、コーナー部になるB—B'ラインでは19度となるのに対し、東堀にあたるC—C'ラインでは23度、同じく拡張区では24.5度となり、縦じて東堀の傾斜がきつくなっている。このことは「町間入高槻城絵図」に記載されている当該地での外堀が、北側の丑寅構ちかくで幅約25m（拾三間）、水深約3m（壱間半）となり、東側では幅約25m（拾三間）、水深約5m（式間半）となっていることに対応するものであろう。

外堀内の調査では、現地表下4.5mのところで堀底が確認された（図版第9・36—上）。下層には暗緑灰色粘質土層（ヘドロ層）が分厚く（中央部で2m）堆積し、若干の遺物が発見されている。上層は暗灰色粘土を主とする混土層などの廃城時の整地層であり、陶磁器をはじめとする多くの遺物が出土している。

ところで三ノ丸跡の郭部分の旧地表面は、中世の溝2を人工的に埋め立てた上面に形成されているが、その大半は近代の整地・落ち込みによって失われていた。わずかに残された部分も柱穴状のピット（径0.6m・深さ0.2m）をひとつ検出したのみで、武家屋敷跡などは確認できなかった。

近代の遺構としては、調査区の東半分にわたる削平面と井戸、そして落ち込みと暗渠がある。削平面は郭部分を深さ1.4mにわたって削り込み水平にならしたもので、破却後におこなわれた堀の埋め戻しと田畠の造成にともなうものである（図版第36—中・41—IV）。

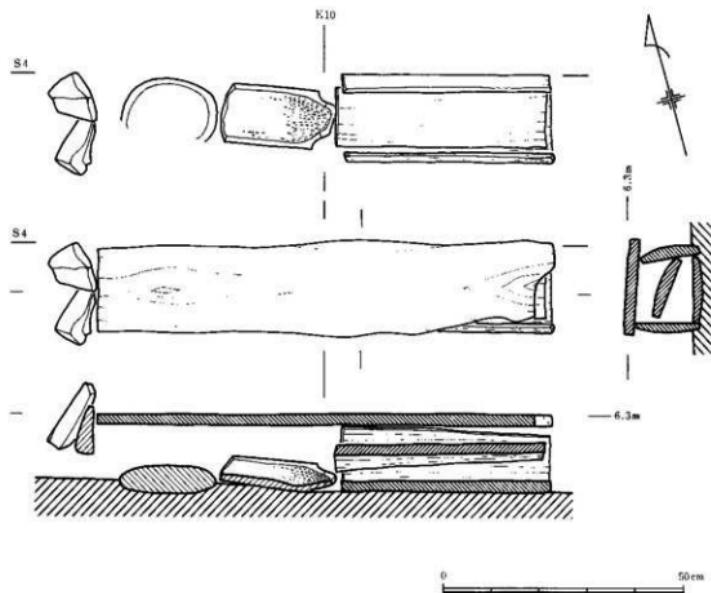
井戸は調査区の南端部中央で検出したもので、この削平面に設けられている。現存深1.4m、上縁径0.7m、底径0.45mを測る。井戸の周辺には拳大～人頭大の石がところどころに敷かれていって、一種のたたきがつくられている。井戸材は桶状の組みものを大小2個もちい、上下2段に重ねて枠組みとしていた（図版第11・40）。上桶は風化と土圧により傷み歪んでいて、現存高は0.95mである。蓋も上下端に2帯あったとおもわれるが、上のほうは欠損している。板材の復元枚数は18枚である。下桶は26枚の板材からなり、高さ0.6mである。内面下方には底板の圧痕がみられ、中程には5ヶ所に方形孔があけられている。蓋は4帯みとめられ、底板に対応する最下帯のみ倍の幅となっている。埋土は暗灰色の腐食土層を主とし、井戸内からは釣瓶・陶磁器・ガラス瓶・瓦などが出土している。

落ち込みは外堀埋め立て後に掘りこまれたもので、南北19m・東西11m以上を測る（図版第36—上・41—IV）。これは明治時代の工兵隊の造成にかかるるものとみられ、北寄りの一画に機械油の沈澱したところが認められた。遺物は外堀の整地層について多く出土したが、大半は埋土に混入したものである。

暗渠は落ち込みの南西隅部で東西方向に検出した（図版第12b）。東端に長さ45cm・幅15cm程度の板材4枚をくみあわせてつくった桶をおき、その西側に凹面を上にした丸瓦と長径0.2m

の平板な石を縦列にならべ、さらにその上を長さ0.95m・幅0.2mの板材で覆い、西端を拳大の石2個で詰めていた（挿図3）。暗渠の全長は1.05mを測る。

なお調査区の中央西寄りにみられる土塹状の掘り込み（図版第3a）は現在のゴミ穴で、板ガラスやプラスチックなどが投棄されていた。



挿図3 暗渠

### 3. 遺 物

遺物は溝1・2（中世）・外堀（近世）・井戸（近代）などの各遺構から出土したのをはじめ、近代の落ち込みや整地層からも多く出土している。

#### （1）溝1出土の遺物

弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・瓦・石仏・砥石・漆器など、古代～中世末にかけてのものがある。

弥生土器（図版第15a）は、前期～後期のものがある。1は前期の壺の頸部で、削り出し凸

帯文の一部が認められる。3は中期の壺の胴部、5・8は同じく底部である。2は中期の壺の口縁部で、4・7は同じく胴部、6は底部である。中期の土器は調整痕・胎土などの観察から、2～7は畿内第Ⅱ様式、8は畿内第Ⅲ・Ⅳ様式となる。9は後期の壺口縁部片、10は底部片、11は高环の柱状部片である。土師器では広口壺（図版第13-1）1点がある。偏球形の体部にテッパ状にひらく口頭部がつき、底は丸底である。体部上半に横描波状文と同直線文を交互に3帯配している。庄内式併行期のものである。須恵器では（図版第15b-1～4）、古墳時代後期のものがわずかに出土している。1は坏身、2は坏蓋、3は壺底部、4は壺胴部片である。

土師質土器としては、中皿と小皿がある。中皿（図版第13-3）は内面をナデ調整し、外側は指押さえ成形後に口縁部のみヨコナデしている。そして口縁端部をわずかに面どりしている。色調は灰白色。なお口縁部外側に煤が付着しており、證明皿として使われていたものであろう。16世紀後半、小皿（図版第15b-11）は口縁が内湾気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。内面はナデ調整、外側は口縁部のみヨコナデをほどこす。色調は淡褐色を呈する。瓦質土器では、鍋の脚部片(6)が出土している。陶器としては、擂鉢の口縁部片(10)が1点ある。口縁部の外側は幅ひろく面をとり、2条の擬凹線をひいている。擂目は櫛歯状の工具でまばらにつけられていて、上端での間隔は4cm程度である。色調は暗茶褐色を呈している。備前V期前半。

瓦では丸瓦が3点（7～9）ある。いずれもコビキaによる造瓦で、内面前端の深い面どりや袋紐の痕跡、いぶし瓦であることなど、中世後半の資料である。

石仏（図版第33c）は阿弥陀如来座像をレリーフしたものか、膝上に定印を結んでいる。細粒花崗岩製。なお裏面に火熱をうけたあとがある。砥石（図版第15b-5）は砂岩製で、中途で折損している。弥生時代のものとおもわれる。

椀（図版第34-11）は浅く薄手のもので、下地に黒漆を塗布したのち、口縁部と高台内および豊付部分をのこして、赤漆を上塗りしている。いわゆる口禿状に仕上げている。口径14.4cm、高さ4.4cmを測る。

溝1出土遺物のうち、弥生土器・土師器・須恵器は高槻城下層遺跡の混入品であり、当該遺構の時期をしめすものとしては、土師皿・備前擂鉢・丸瓦・椀などがあげられ、およそ16世紀の中頃～後半が妥当とおもわれる。

## (2) 溝2出土の遺物

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器の細片がわずかに出土している（図版第16a）。

弥生土器では中・後期のものがある。4は中期の壺体部片、5～7は同じく壺体部・底部片である。なお7の内面には6×3mmの擦痕がみられる。1・3は後期の壺口縁部片、8は同じ

く底部片である。土師器では、2が古墳時代の壺口縁部片、9は時期不詳の壺片である。須恵器では、10が壺口縁部片、13が高坏脚部片で、ほかに若干の壺胴部片がある。土師質土器は壺の口縁部片(14)のみで、外面に煤が付着している。陶磁器では備前の擂鉢片(15)、白磁端反皿の口縁部片(16)がある。

これらの遺物のうち、弥生土器・土師器・須恵器を除いた14—16が満2の時期をしめすものとかんがえられるが、端的なものがなく16世紀代ということになろうか。

### (3) 外堀出土の遺物

外堀の遺物は、下層の濃緑灰褐色粘質土層（ヘドロ堆積層）と地山崩落土層から出土したものに限定しており、上層の魔城時の遺物は除外している。

20（図版第14）は瀬戸の灰釉大碗で、高台は露胎である。17世紀後半のものであろう。また1~4（図版第16b）は、砂質土に石灰をませあわせたもので、壁土とかんがえられる。5は弥生土器（畿内第Ⅱ様式の壺底部）、6・9・10は唐津陶で、6・10は碗の底部、9は同じく口縁部片である。7は丹波の擂鉢、8は備前系の擂鉢、11~13は伊万里染付の碗皿類である。なお堀底に突き刺さった状態で、至道元宝（図版第31b-8）が1枚出土している。径2.45cm。

北東コーナー部では丹波の盤（図版第23a-3）が、上記の壁土4とかさなって横木の下から出土している。さらにこのコーナー部からは、椀と両板材（図版第34b）も検出している。椀(2)は下地に黒漆を塗布したのち、外面に黒褐色の色漆、内面に赤漆を上塗りしている。文様はない。口径11.4cm、高さ4.4cm。両板材は側板とかんがえられ、逆台形をしている。下辺に2ヶ所の切り込みがあり、表面中央には2本の平行沈線による菱文が刻まれている。幅28.0cm、高さ13.5cm、厚さ1.8cmを測る。

そのほかでは貝殻類（図版第34c）が出土している。1はアワビの類、2はサザエ、3~5はマシジミ、6はザルガイ、7~9はハマグリである。いずれも棲息していたものではなく、食用に供されたものであろう。

外堀内の遺物は、弥生土器を除いて、おおむね17~18世紀のものでしめられている。

### (4) 井戸出土の遺物

釣瓶以外は、井戸の埋め戻しに際して混入したもので、陶磁器や瓦類などはいずれも細片となっている。

釣瓶は井戸内に落ち込んだ状態で出土した。本体と取っ手からなっている。本体は一木をくりぬいて筒桶状につくっており、上方に取っ手をさじこむための方孔を一对あけている。取っ手は両端をやや細く方形にけずりだしたもので、中央部を厚くつくり、そこに紐を結ぶた

めの金具をうちつけている。口径21.0cm高さ25.5cmを測る。

他の遺物では、土師質土器（壺）をはじめ、伊万里染付・青磁、京焼、信楽（擂鉢）、ガラス瓶、土人形、漆喰などがある（図版第17a）。また瓦類も出土している。

### (5) 整地層出土の遺物

今回の調査で得られた遺物の大半は、この近代の整地層（削平面・落ち込みなど）から出土している。時期的には弥生時代～近代のものまでふくまれるが、圧倒的に近世のものが多い。種類としては、土器・陶磁器をはじめとして、土人形・瓦・硯・古銭・煙管・包丁などがあり、特異なものとして、匣鉢・窓壁片がある。以下にその概要を記す。

#### 弥生土器

弥生土器（図版第17b）は、中期から後期のものまである。すべて破片で、1・6・8は畿内第II様式の壺、2は同じく水差、3～5・7・10は壺である。11は畿内第III様式の壺の口縁部で、14は畿内第V様式の壺、12は鉢、13は甕である。このほかにもいくらかの土器片を見るが、全体的には畿内第II様式の土器が多く、ついで畿内第V様式のものが目立つ。また石包丁の破損品ではないかとおもわれる黒色粘板岩（高島石）が1点出土している（図版第18a～13）。幅10.3cm、厚さ0.28cmで、両面とも擦ったあとがみられる。石包丁の素材としては薄く、なにか他の用途もかんがえられる。

#### 須恵器

古墳時代のものを中心に一部奈良時代のものもみられる（図版第18a）が、量的にはすくない。壺（1～3）・壺（4）・提瓶（5）・高壺（6、7）・甕（8）があり、後者では壺（9～11）・壺（12）がある。

#### 陶磁器

##### 唐津<sub>④</sub>

もっとも古いものとしては、16世紀末の灰釉皿2点がある。1点（図版第13～2）は三日月高台の端反皿で、高台は無釉。胎土目。もう1点（図版第18b～1）は腰折れの小皿で、同じく三日月高台である。胎土目。

17世紀代では、前半～中頃にかけて皿・碗・大鉢類が若干みられるが、後半ではいわゆる三島手・刷毛目装飾法のもの、あるいは京焼風陶器など多様なものが出土している。前半では、2・3（図版第18b）が砂目積・三日月高台の皿である。4～7はやや深みのある碗で、釉がながれたり、むらになっている。このうち4は三日月高台で、皿2・3とともに古相をしめしている。また中頃とかんがえられる褐釉陶では、天目碗（図版第19a～8～10）と瓶の底部（11）とおもわれるものがある。8と9は同一個体で高台がやや高く露胎となっている。後半の三島

手には、大鉢（図版第19a-1~6）と皿（7）があり、6には砂目積のあとがみられる。つぎに刷毛目の装飾をもつもの（図版第19b）では、碗と大鉢がある。2と3の置付には砂が熔着がみられ、5の見込にも砂目が観察される。京焼風陶器（図版第21a）には、呉器手碗（1~9）と薄手のシャープな削りによる皿碗類（10~19）がある。呉器手碗はいずれも無文で、淡黄灰色の釉で覆われているが、置付は無釉でわずかに砂が熔着している。後者は高台無釉のもので、見込にくずれた山水文を描くものが多い。なお16は見込が無釉で、皿碗以外の器種がかんがえられる。胎土は灰色系（10・11・14・15）、明灰色系（12・17・18）と淡黄灰色系（13・16・19）とがある。ところで15~19の高台内には、円窓とともに、それぞれ「吉松口」、「清」・「清水」・「木阿弥」印を押捺している。陶胎染付としては皿（図版第19b-6）1点があげられる。高台は無釉で、見込を蛇の目状に釉剥ぎし、砂目積の痕跡がみとめられる。

18世紀代では、陶胎染付の碗・鉢類（図版第18b-9~12）と刷毛目文様のある小皿・碗類（図版第19b-7~13）ぐらいである。なお当期から19世紀にかけてとおもわれる鐵絵小皿（図版第14~19）も1点出土している。

#### 伊万里

17世紀の中頃から後半にかけては、染付・青磁染付・青磁・白磁・色絵などがある。染付は碗類（図版第20a-1~8）と皿、鉢がある。碗1・2は単線による網目文を描いた生掛けのもので、高櫻城三ノ丸出土染付のなかでは最古相をしめす。また碗7（図版第13）の高台内には「大明年製」の染付銘がみられ、10の簡茶碗の見込には五弁花が記されている。皿9（図版第13）は、高台径が小さく見込を蛇の目状に釉剥ぎしている。2・3（図版第20b）は数少ない芙蓉手の皿である。5・7は見込に五弁花が記された新相のもので、7の高台内には「大明年製」、同じく10には「成化年製」の染付銘がある。また5・7・9・10にはハリ支えの痕跡がみられる。鉢1（図版第20b）は輪花で、口紅装飾している。青磁染付では、鉢が1点（図版第20a-12）みられ、内面を青磁、外面を染付としている。なお掲載していないが、内面を青磁、外面を鐵釉とした碗も1点検出している。青磁では三足付大皿（盤）が1点（図版第23a-6）ある。高台内を蛇の目状に釉剥ぎし、鉄を塗っている。見込にハリ支えのあとがのこる。白磁は碗（図版第20a-9）をはじめ、ぐい呑や小壺（口絵2下）などがみられる。色絵では碗（図版第20a-10）や鉢・皿（口絵2上）などがある。とくに皿には柿右衛門手のようなものまで含まれている。

18世紀代では染付・青磁染付・白磁・色絵などがある。染付は碗（図版第13-12、14-14・17・18、21b-1~9）を中心に、皿（図版第14-13・15、21b-10・11、23a-5）、鉢、仏飯器がある。碗ではくらわんか手の14（図版第14）があり、染付銘にも福のくずれたもの（図版第21b-4）がみられる。またコンニャク判とよばれる装飾法やいわゆるタコ店草文も散見

される。皿では高台径が小さく、見込を蛇の目状に釉剥ぎしたものがあり、10の高台は無釉である。また13（図版第14）は見込にコンニャク判による五弁花がほどこされている。5（図版第23a）は口縁が内溝する大皿で、ハリ支えのあとがみられる。鉢（図版第14-16）は筒形の重ね鉢のひとつである。仏飯器は何点か出土しており、11（図版第13）では脚部にあつく釉の流れたあとがみられ、台裏は無釉となっている。青磁染付では、筒茶碗（図版第20a-13-16）が目立ち、いずれも内面を青磁、外面を染付としている。14-16にはコンニャク判による五弁花が押されている。白磁（口絵2-下）では型打ちの鉢や合子・紅皿などが、また色絵（口絵2-上）も合子などはこの時期のものであろう。

19世紀代のものはあまり出土しておらず、高台の高い、いわゆる広東碗（図版第21b-12-14）が数点みられる程度である。

### 京焼

17世紀代では、碗2点（図版第22a-5・6）が出土している。どちらも口縁部の破片で、5は色絵碗、6は染付松文碗である。18世紀代では、7が銹絵染付碗、8が染付碗である。9・10は、銹絵染付徳利の破片で竹文ほかが描かれている。そのほかでは碗類などがみられる。19世紀代では、染付碗片（12）や花生とおもわれる染付片（13）がある。また、完形品の蓋（図版第14-24）が1点あり、中央に組状のつまみを貼り付けている。さらに、京焼とおもわれる碗（図版第23b-4-7）なども出土している。

### 楽

黒茶碗（図版第23b-8）が出土している。数片に分かれているが、同一個体のもので高台部は欠失している。暗灰色の胎土に艶のある黒色釉をかけた腰高の碗である。器壁は既して薄く、丁寧な作行である。高台近くに「楽」印が押され、立ち上がり部にハサミのあとがついでいる。江戸後期の作。よほどしっかりした偽物であるといふ。<sup>⑨</sup>

### 瀬戸・美濃

中世のものでは、16世紀代の褐釉天目茶碗の口縁部や灰釉皿などがわずかにみられる（図版第22a-2-4）。

近世では、17世紀後半代の胎土日の馬目皿（図版第23a-1）、砂目の大盤（同-2）、志野の鉄絵鉢（図版第14-21）などがある。18世紀代では上半部のみの遺存ではあるが、緑釉貼付雲竜文蓋付壺（図版第14-22）が秀逸である。また、緑釉・青緑釉・鉄絵の皿類（図版第22b-1-6）や火鉢の類とおもわれる施釉陶片（7）も出土している。

19世紀代では、染付の碗・皿類（同-8-12）があり、銅版絵付によるものが多い。23（図版第14）もこの時期の染付輪花皿であろう。

### 信楽・丹波

信楽の古いものとしては、16世紀後半～17世紀前半に比定される擂鉢片（図版第24a-1・2・3）があり、櫛齒による擂目が体部では少しまばらに、見込では一種の斜格子状にほどこされている。口縁端部は体部に直交し、やや中くぼみの平坦面となっている。17世紀以降では、擂鉢（4・5）のほか壺（図版第22a-14・15）、大壺片（図版第23a-4）などがみられる。

丹波では、擂鉢が数点出土している。6（図版第24）は16世紀後半のもので、内面にヘラによる擂目が放射状にひかれ、口縁は丸くおわっている。色調は明褐色を呈している。対して江戸時代の7～11は、櫛齒によって擂目が密にひかれていて顯著な違いをみせている。また見込の擂目は丸に十文字を組み合わせた構図となっている。色調は明褐色ないし褐色を呈している。

### 備前系

擂鉢（図版第25）のみ検出している。原則的に口縁部外面は大きく面をとって、2条の凹線をひき、見込には3帯の擂目を交差させている。ただ体部内面の擂目には、上端部でいくらかの間隔をもつ1・4と隙間なく密にはほどこす2・3があつて区別できる。色調も前者が暗褐色、後者が明褐色を呈し対応している。前者が17世紀後半、後者は18世紀以後とかんがえられる。<sup>⑤</sup>また底部の形態にも2者あり、ひとつは平坦な平底（5・6）、いまひとつは外面の周縁近くに、溝状の凹線をまわしている。これは時期差ではなく、機能の違いによる形態差とおもわれ、凹線をもつ7は底部側縁部を厚くつくっている。

### 堺（擂鉢）<sup>⑥</sup>

擂鉢の形態は18世紀の備前系擂鉢とあまり変わらないが、窯詰法と見込の擂目によって分別される。すなわち重ね焼をしないとおもわれることから、体部外面と口縁部外面が同一色を呈している。また底部外面の敷砂痕も顯著である（図版第26a）。見込の擂目は、櫛目の弧状線3単位の両端がそれぞれ重なりあって三角形状に組み合せている。比率的には備前系擂鉢を少し下回る程度の出土量がある。

### 三田

青磁片が若干出土している。主に皿類で、1（図版第23b）は角皿、2・3は輪花皿である。2の高台は貼り付けている。3は褐釉の小花文を釉内に押しつけている。また当該片には焼接ぎがほどこされている。

### 外国産陶磁器

中国産の陶磁器と安南産の染付がある。

まず中国産の青磁では、竜泉窯系の碗の底部片が2点（図版第23b-10・11）ある。10は高台断面が四角形で、底部は厚くつくられている。施釉は墨付まで、高台内は露胎。体部文様

は不明。釉調はやや渋った緑灰色。13世紀前半。11は高台内を蛇の目状に釉剥ぎし、底部は厚くつくなっている。体部には蓮弁文を配している。見込に筆による片彫り文がみられる。釉調は淡い緑青色を呈している。15世紀代のものであろう。9は明のスワトウ手の色絵皿で、骨付から高台内にかけて、砂が焼着している。16世紀後半～17世紀前半のものであろう。12・13は御本手の碗片である。12は磁器で、豊付を除いて透明釉が全体に薄くかけられている。13は渋った淡茶灰色の釉を陶胎にほどこしたもので、高台内のみ露胎となっている。見込にスタンプ文がみられる。2点とも15～16世紀にかけてのものとおもわれる。白磁では、腰折皿（口絵二下）がみられる。16世紀代のものであろう。

安南産の染付片（図版第22a-1・口絵2-上（左上））は、碗の口縁部とみられ、暗灰色の磁胎に透明釉がかけられている。釉は貫入が目立ち、絵付は明るくもくすんでいて、いわゆる絞手となっている。当該片は16～17世紀におこなわれた蜻蛉手の碗であったとおもわれる。<sup>⑨</sup>

#### 焼接ぎの資料

前述の三田青磁以外にも、焼接ぎの資料がかなりみられた（図版第27a）。伊万里染付の碗・皿類を中心に、一部色絵の碗（？）や、瀬戸の染付にもほどこされている。時期的には17～19世紀のものになされているが、全体としては古いものに目立っている。また8と9の高台内には、焼接ぎ時の記録とかんがえられる文字・印がみられ、それぞれ「へ四百六十七」、「△」とガラスで記されている。

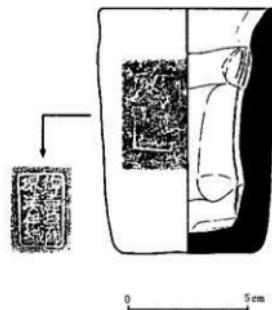
#### 土師質土器

焼塩壺・皿類・炮烙・堀などがある。

焼塩壺は2点出土している。そのうち1点は口縁部片（図版第22-16）であるが、どちらも同じ形態をとるとおもわれる。6（図版第13・挿図4）は、布をまいた芯に粘土紐を輪積みにして成形したのち、外面を箒ナデして仕上げたもので、

平底・筒形の形態を呈している。口縁部内面は傾斜をもたせ、端部をやや薄くしてある。淡茶褐色を呈す。外面の中位に長方形の枠にかこまれた2行8字分の刻印がみとめられ、右行は「御□□□」、左行は「□□□織」と読める。既存資料から、右行は御塩壺師、左行は堺湊伊織として判読でき、17世紀後半に比定できる。

皿類は成形や調整の違いから5種に大別できる。ひとつは、洛北木野地区で製作されたとかんがえられる一群<sup>⑩</sup>（図版第27b-1～5）で、肘を回しながらつくりあげていくものである。口径と調整の違いで、さらに細分で



挿図4 整地層出土の焼塩壺

きる。コオロケの5は、口径5.4cm、高さ1.1cmを測る。成形後ナデ調整はおこなっていない。他にも数点みられる。コオジュウの4（図版第13）は口径8.7cm、高さ1.8cmを測る。内面全体を時計回りにナデ調整し、口縁部外面はヨコナデ調整している。コオジュウはこの1点のみである。オオジュウは1～4（図版第27b）をはじめとして、数多くみられる。3は口径10.1cm、高さ1.6cmを測る。いずれも調整後、底部と立ち上がり部の境に沈線を一周させている。また3の内底面には、肘当の麻布の痕跡が観察され、さらに1と3の口縁部には数ヶ所に黒く焦げたあとがみられる。つぎにこれらと形態は似るが、外底面から口縁部へなめらかに移行し、かつ全面に施釉された一群（6～8）がある。6・7は口径11cm前後、高さ1.9cmを測るもので、摘がついている。8はさきのオオジュウより一まわり大きくて、口径12cm、高さ2.1cmを測る。摘の有無は不明。つぎは糸切底の一群（図版第27b-9～11）で、完存品はないが、口径6cm前後のもの（9）と9cm前後のもの（11）がある。施釉は内面全面と口縁部外面のみである。なお10の内底面には判読不明の字体で、印を押捺している。ほかでは厚手粗製の12（口径8.9cm、高さ2.2cm、厚さ0.7cm）と口縁のヨコナデに対応した明瞭な段差を外面にもつ4（図版第13）がある。12は在地産とおもわれるが、4については判然としない。皿類はいずれも江戸期のものとかんがえられる。

炮烙は、底部から体部へゆるやかなカーブを描いて移行するもの（図版第28a-2）と底体部の境が屈曲して立ちあがるもの（3・4）がある。いずれも底部外面は強弱の差こそあれ、箝削りがほどこされている。5は底部片で、内面に焼け焦げたあとがついている。1・2は17世紀代とおもわれ、3・4は18世紀以降とかんがえられる。壇も2種あり、口縁部の外側を断面三角形状に肥厚させたもの（6）と口縁下を三角凸帯状に突出させたもの（7～9）がある。このほかでは、風炉の口縁部片（10）や火床（11）などもみられる。

#### 土人形・小型土製品

手づくねのものは中空につくられた牛（図版第28b-5）の1点で、あとはすべて型づくりである。型づくりでは、型押しして組み合わせた中空のもの（3・4・6～8）と合わせ型による中実のもの（1・2・9）がある。また、キララの付着したものも多数みられる。種類としては、西行法師・檀那・飾馬・荷役牛・鳥居などがある。土製品の10・11は軸彩した小さな家で、10の底裏には、「楽定」の印判が押してある。箱庭などに用いたものであろう。

#### 瓦

軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・隅瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・雁振瓦・鬼瓦・目板瓦・輪違い瓦・道具瓦などがある（図版第29・30）。

軒丸瓦は6点ばかり出土している。1は瓦当径17cmを測る。瓦当文は中心に左巻きの三ツ巴文をおき、周囲に15個の珠文を配している。ハナレ砂の使用が顕著で、丸瓦部はコビキ<sup>モ</sup>によっ

ている。17世紀代のもので、高櫻城修築時（元和三年）にちかいⅢ期の所産とかんがえられる。<sup>⑤</sup>他の軒丸瓦（2～6）については、同じく左巻・三ツ巴文であるが、珠文が大きく扁平で新相を呈し、おおむねⅣ～Ⅴ期に相当する。軒平瓦（7～20）は20点ちかく検出したが、7は中心飾りにひとつの子葉と3点の珠文を組み合わせ、左右には幅広の主葉を下むきにおき、その外側は下方へ巻き込む唐草を配している。高櫻城跡では初見のものである。胎土は砂質で、Ⅰ期のものとかんがえられる。そのほかの軒平瓦は、いずれも中心飾りに花冠と萼を有する形式のもので、高櫻城ではⅤ期・Ⅵ期に編年されるものである。

軒棟瓦は2点（21・22）あり、21は軒丸瓦部のみの遺存、22は軒丸瓦部を欠く形式のものである。Ⅶ期ないしⅧ期のものであろう。隅平瓦の23は、上縁を大きく面取りし、丸瓦を受ける左端上縁部をそぎ落としたもので、中心飾りに花冠と萼をそなえている。多くの軒平瓦同様Ⅷ期以降のものである。

丸瓦は平瓦とともにもっとも多く出土している。技法的には、コビキaによる24・25とコビキbによる26～28などがあり、前者は中世高櫻城、後者は近世高櫻城のものである。量的には江戸時代のものが圧倒的に多い。なお、27は暗渠に2次使用されていた。また28の凸面中央に「天吉」の印判が押されている。「天吉」とは天神前吉兵衛の略で、江戸時代～明治時代にかけて城地北方にある天神山の麓で営まれていた瓦屋の屋号である。

平瓦では、コビキaによる中世の29を1点のみ掲載したが、丸瓦同様近世のものが絶対多数をしめている。30は近世のものであるが、当初割突斗瓦としてつくられたものを、その後詰瓦として利用したものとおもわれる。棟瓦は2種みられ、31は棟部がなだらかに隆起する一枚づくりであるのに対し、32は平瓦部と棟部の接合部上端に稜線がみられる。形式的には32が古く、31が新しくなるとかんがえられる。33は雁振瓦の尻部片、34・35は鬼瓦片である。34には二階菱文の一部がみてとれ、35では外表面に花形のスタンプ文を多数押している。36はコビキbによる輪違い瓦、37は解用の目板瓦である。38・39は平瓦の頬とおもわれるが、38の両面には粗い筋目が縦横にほどこされている。39は側縁に棟状の低いたちあがり部が付加されているものか、判然としないものである。

#### 匣鉢・窓壁片

1～5（図版第31a）は円筒形の匣鉢片である。唯一全高のわかる4は高さ10.4cm、底径18cmを測るが、底部の厚さは4の1.4cmに対し、3が2.4cmとなりまちまちである。胎土はいずれも砂粒や小石が多く含まれており、信楽系のものを用いたとおもわれる。底部は糸切りであるが、3のみあとでナデている。仕上げは回転ナデ調整である。6～11は窓壁片で、このほかにも数点検出している。いずれも焼けて赤化している。6～8は歯をmajえたもので、9は表面がガラス状に熔化している。また10はレンガ状のもので、トンバリの一部とかんがえられる。

### 金属製品

煙管・銭・刀装具・包丁がある。

煙管（図版第31 b - 2 ~ 5）は雁首1点、吸口3点がある。2は真鍮製で、長さ5.1cm、火皿径2.05cmを測る。火皿と首部のあいだに補強帯はない。火皿前面に「力」の刻印がみられる。3も真鍮製で、2とともに検出した。長さ3cmで肩がつき、羅字の差し込み部に15本の細圈線がみられる。4は銅製で、長さ4.9cmを測り、肩がつく。5も銅製で、長さ5.5cmを測る。肩部のない形態のものである。2・3は18世紀前半、4は17世紀後半、5は18世紀後半頃のものであろう。銭は、寛永通宝2枚（6・7）と不明銭（9）がある。6は古寛永で、径2.35cmを測る。同じく7は2.3cm、9は2.3cmである。10は銅製の鞘尻とかんがえられ、花文を毛彫りしている。復元長径3.3cm。包丁（図版第30 b - 40）は全長24.6cm、刃渡16.8cmを測る。錆化が激しい。

### 石製品

硯と棒状具がある。

硯は5点（図版第32）検出している。庭郭出土の1点（3）を含めて、すべて高島産の虎斑石による長方形の硯である。完存品ではなく、1が現存長15.8cm、幅7.6cm、厚さ2.1cmを測り、同じく2は幅5cm（硯面は欠損している）、6は現存長11.6cm、幅6.4cm、厚さ2.3cmを測る。これらは下面の内削りの有無によって2者に分けられる。すなわち内削りのない1・2・4のa類と内削りのある3・6のb類である。1・4は硯面陸部に墨磨の凹面がみられ、長期間の使用がみとめられるのに対し、6は陸部に凹みがなくあまり長く使用されていない。なお1の下面には2行にわけて『□□村井之内』『小泉姓』が、2の下面には『池□尻』、同じく側面に『金拂』と小刀のようなもので刻まれている。

棒状具(1)は、長さ7.6cm、径0.7cmを測る淡灰色の滑石製のもので、全体を粗く削り込んだ多面体を呈している。先端をにぶく尖らせており、上端は斜めに剃ぎ落としたようにしている。用途は不明。

## 4. 三ノ丸跡外堀の花粉分析

大阪府立三島高等学校

徳丸始朗

### 1. はじめに

昭和61年度におこなわれた高槻城三ノ丸跡の発掘調査に際し、外堀遺構内の土壤について花粉分析を実施したので報告する。

試料は表1に掲げる9点で、高槻城跡遺跡調査会により採取されたものである。

資料No.	土層名	備考	西壁断面図の土層番号
No. 1	淡黒灰色粘土層	外堀南肩当初崩落土層	49
No. 2	暗青灰色砂層	外堀南肩当初崩落土層	48
No. 3	濃緑灰色粘土層(下位)	外堀の埋積土層(ヘドロ層)	
No. 4	濃緑灰色粘土層(中位)	外堀の埋積土層(ヘドロ層)	44
No. 5	濃緑灰色粘土層(上位)	外堀の埋積土層(ヘドロ層)	
No. 6	暗灰色・青灰色粘土の混土層(整地層)	ヘドロ層中のブロック	
No. 7	暗灰色・青灰色粘土の混土層(整地層)	廃城後の整地層	35
No. 8	黒灰色土層	廃城後の整地層	28
No. 9	暗灰色粘質土層	廃城後の整地層	27

表1 三ノ丸跡外堀花粉分析資料

### 2. 結果

分析処理は試料約250~300グラムについておこなったが、分析方法等については省略する。花粉化石を種・属・科ごとにまとめたのが第2表である。検出された花粉化石のなかには同定不能のものや、不確実なものもあったが、同定の確実なものについて主要樹木花粉が500以上になるまで計数し、これに草本花粉を加えた全花粉に対する百分率を求めた。しかし、試料No. 8は花粉化石の残留状態が悪く、検出されたものについてのみ○印を付けるにとどめた。

科・属・種別		試 料								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹	イチヨウ属	0.48					0.15	0.47		
	マキ属	0.16			0.74		0.15			0.61
	モミ・トウヒ属	37.10	0.37	6.52	0.55	0.34	3.72	0.79	○	1.53
	ツガ属	0.65		0.47	0.37		0.31	0.16		0.76
	マツ属	12.90	71.37	43.32	91.31	82.63	39.48	60.62	○	44.42
	スギ属	1.29	0.37	0.16		0.17			○	
	ヤナギ属	0.16	0.37	0.78			0.31	0.16		0.31
	ヤマモモ属	0.16	0.37	1.08	0.19		0.15			0.15
	クルミ科	0.32					0.15			0.15
	クマシデ属	1.94		0.93	0.19	0.34	1.08		○	1.07
	ハシバミ属	0.48					0.62	0.16		0.61
	シラカンバ属			0.78	0.19		0.31		○	0.31
	ハンノキ属	1.78	3.85	1.08	0.37	0.68	2.01	2.68	○	15.11
	ブナ属	1.13		0.93	0.55	0.17	0.15	0.47		2.14
木	コナラ属	8.71	2.02	4.34	0.19	1.36	10.53	5.98	○	2.44
	アカガシ属	13.87	0.73	1.55		0.34	5.73	1.10		0.46
	クリ・シノキ属	6.45	0.73	0.78			4.49	10.08	○	
	ニレ・ケヤキ属	0.65	3.30	8.54	2.40	6.65	0.93			0.61
	エノキ・ムクノキ属	0.32	8.99	1.08	0.92	4.26	0.31			0.46
	クスノキ科						0.31	0.79		0.46
	サクラ属	0.65			0.55	0.17	0.62	0.16		
	センダン属									1.37
	アカメガシワ属			16.92		1.19				
	モチノキ属	0.37					3.87	0.63		4.43
草	カエデ属		1.10				1.09	0.47		0.31
	ツツジ属	0.32			0.16		1.86	0.16		
	カキ属		0.73	0.16	0.55		4.03			2.14
	スイカズラ科									0.31
	大型イネ科	1.29	3.12	5.59	0.55	0.34	0.46	2.83	○	8.39
	小型イネ科	0.81	0.55	0.62		0.51		2.52	○	2.44
	カヤツリグサ科	0.32	0.18			0.17	0.15			0.46
	ソバ			0.31				0.63		1.98
	ハス			0.16	0.19		0.15			
	セリ科	1.77		0.16		0.34	0.93	1.89		
本	タデ科	2.10	0.37	0.62			3.72	0.16		1.53
	ヨモギ科	2.42	0.37	0.62			7.12	3.15	○	1.68
	カナムグラ	0.65								0.15
	アカザ科	0.32	0.37	0.93		0.17		1.26		0.61
	アブラナ科	0.48	0.37	0.47		0.17	0.77	0.32	○	0.61
	ナデシコ科	0.16		0.31	0.19		0.62	1.73	○	0.46
	キク科	0.16		0.47			0.62	0.47		0.61
ミチヤナギ					0.16					
オキナダサ							3.10	0.16		0.92

表2 三ノ丸跡外堀花粉分析結果

### 3. 考 察

試料は採取した地点の堆積状態により次の4グループに分けられる。

グループ	試料番号
A	No. 1, No. 2
B	No. 3, No. 4, No. 5
C	No. 6
D	No. 7, No. 8, No. 9

Aグループは外堀完成後、側壁が崩落した層であり、この試料中には外堀構築以前のかなりの時期にわたる花粉と完成当初の花粉が混在している可能性が高い。

Bグループの3試料は外堀完成時から廃城に至るまでの間に自然堆積したものであり、外堀周辺の植生をあらわす花粉が時代を追って含まれているものと考えられる。

Cグループは木株が堀に投げ込まれた際に生じたくぼみに堆積したものである。投入された木株に付着していた土と、自然堆積していた土が舞い上がって再び堆積したものとが混じり合った擾乱層である。

Dグループは客土により堀を埋めた土砂である。したがってこの中に含まれる花粉は、この土砂がかつてあった周辺の植生と、堀を埋めた後の周辺の植生によるものが混在していると考えられる。

以上のことから、Bグループの試料が当時の植生をあらわすのに最も適しているといえよう。以下、このBグループの分析結果を主に検討を加えてみる。

花粉分析の結果は、周辺の植生を示す絶対的なものでなく、一般的傾向を示すものである。百分率の比較的高いものは、その樹種が多く生育していたと考えられるが、むしろすぐ近隣に生育していたと仮定して考える方が無難な場合もある。このような見方で考察していくことにする。

分析結果は試料により多少の違いはあるが、外堀完成時から廃城に至る間、三の丸周辺の植生はマツ属が大部分を占めていたようである。これにカシ類といわれるコナラ属や、ケヤキ・エノキ・モミ・ツガ等の高木が生えていたと思われる。

マツは完成当初43%程度であるが、時代の移りとともに91%, 82%と高率を示す。これは城内外の整備が進むにつれて、屋敷や道のマツが次第に生育していった。その数が増加していったりしたことによるものであろう。またサクランボ属の花粉はウメではないかと考えられる。マキ属・カキ等とともに庭木として調査地近くに植えられていたのではなかろうか。

草本の方では大型イネ科が全試料から検出されている。大型イネ科をイネと断定することは

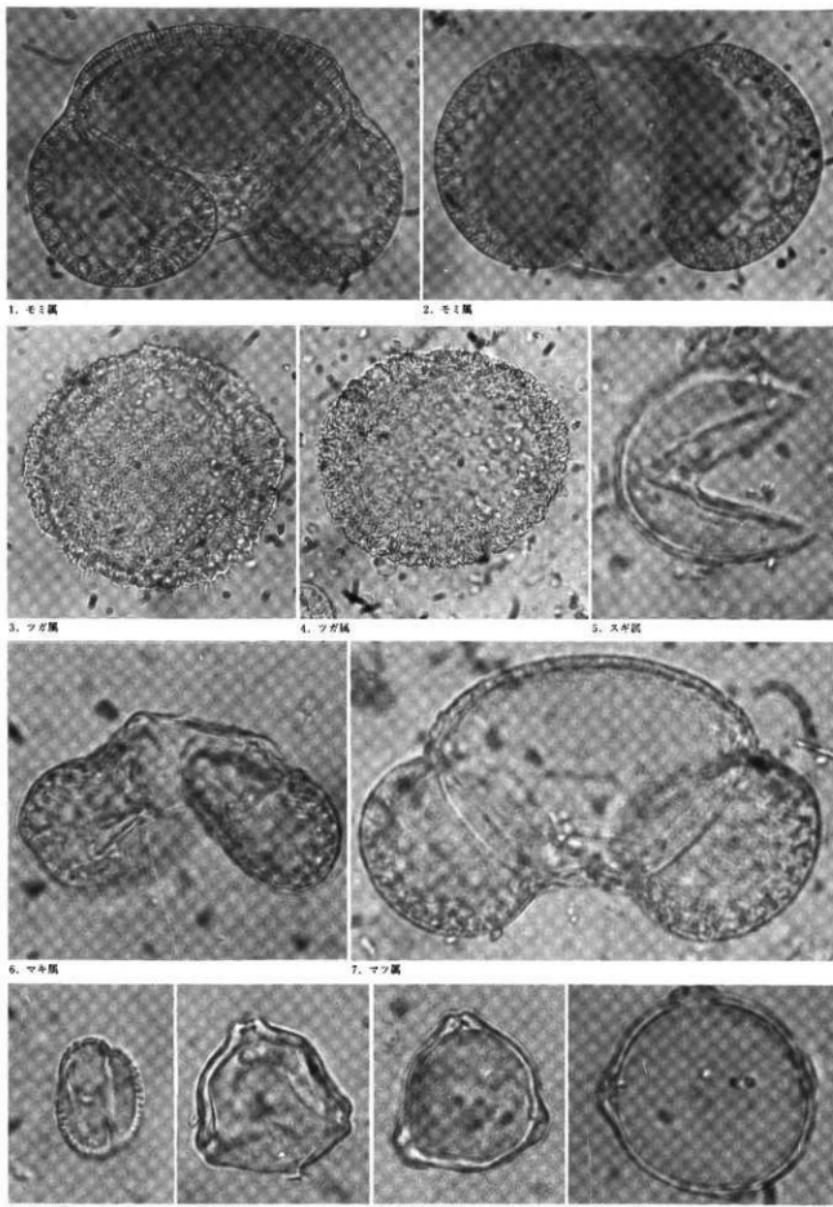
できないが、形態からおそらくイネであろうと思われる。そのイネと思われる花粉はNo. 3の試料で5.6%と比較的多いが、No. 4とNo. 5では0.6%, 0.3%と少ない。またソバもNo. 3とNo. 4で検出されているが、No. 5ではみられない。その他の草本はいわゆる雑草類で畠や水路等にみられるものであるが、これもNo. 3だけに多い。これらのことと総合的に考えると、外堀完成時の城外にはまだ田畠があり、やがてそれらの場所に武家屋敷や町家がつくられ、田野がなくなっていたのである。そのため、外堀完成当初にはイネ・ソバの栽培植物の花粉やその周辺の雑草の花粉が多くみられたが、田畠が屋敷等に変わったにつれ、栽培植物の花粉が減少していったものと考えられる。城下町がつくられていくにつれて、城外の田畠が姿を消していったのである。

城下町が完成したと思われるNo. 4, No. 5の試料からは、イネと思われる花粉が少量ではあるが検出されている。近くでイネが作られ、その花粉が飛来したか、水の中に浮遊し、その水が外堀に流れこんで堆積したとしか考えられない。武家屋敷や町家で水田や畠を考えることはできない。近くにまだ空き地が残っており、そこで栽培されていたのではなかろうか。あるいは、城下外の田畠の水が外堀に流入したことにより、それらの花粉が入りこんだともいえよう。

廃城後の堆積土であるD グループについてみると、大型イネ科とソバによって下層の埋土No. 7と上層の埋土No. 9を比較すれば、上層のNo. 9の方が数値の上では高い。前述したように、客土層なるがゆえの擾乱層であって必ずしも廃城後の植生を示しているものではないが、No. 7は三ノ丸の土砂によるものであるとすると、No. 9のイネとみられる花粉は廃城後のものとみることもできよう。外堀を埋めた後は、水田や畠として利用されたのではなかろうか。そう考えると、イネらしい花粉やソバの類が増加しても不思議ではない。また、刈りとった稲束をかけるために水田に栽培されることの多いハンノキがNo. 9で高率を示しているのは、それを裏付けるものかも知れない。

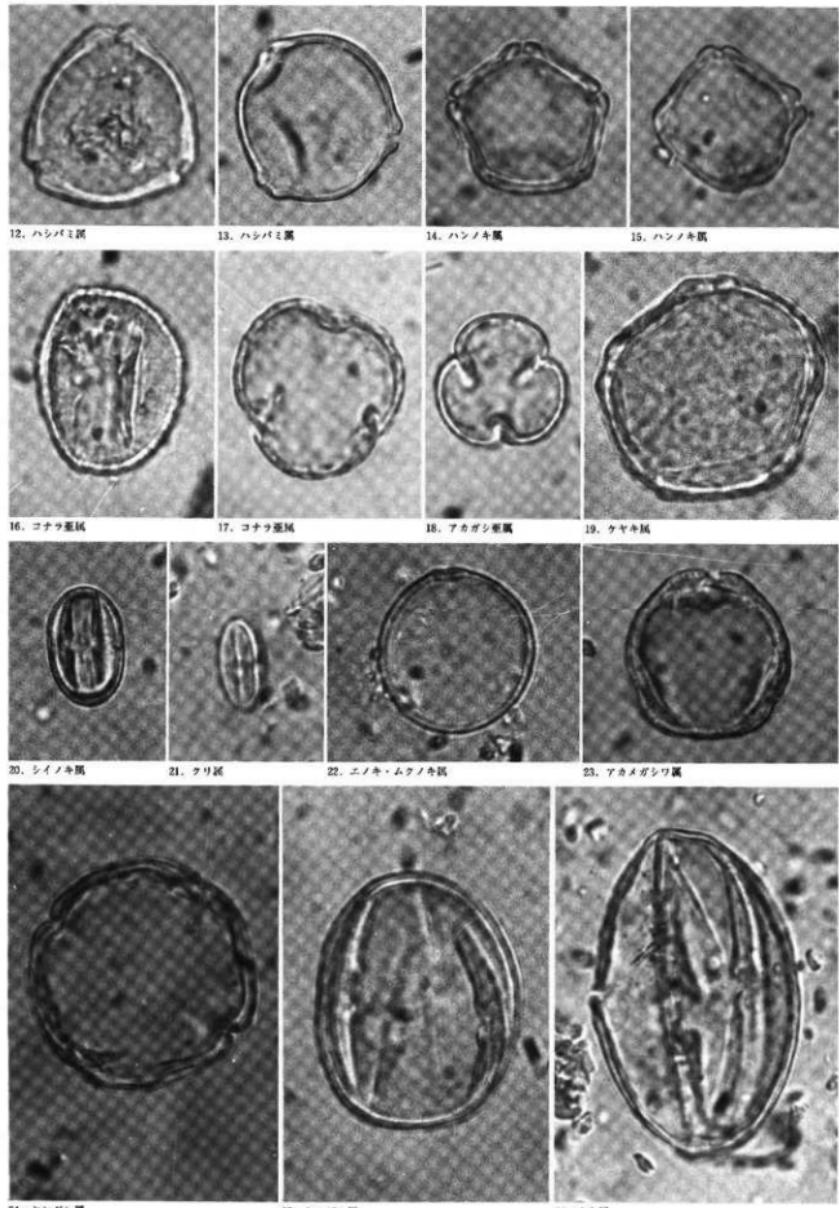
#### 4. むすび

三ノ丸が構築され外堀がつくられるまで、その周辺には水田や畠があったようである。それらが武家屋敷や町家に変貌し、マツが多く植えられていった。当時の屋敷内には、ウメ・マキ・ケヤキ・エノキ・カキ等が植えられていたことであろう。やがて廃城に伴い外堀は埋められ、その跡は再び田畠となったようである。

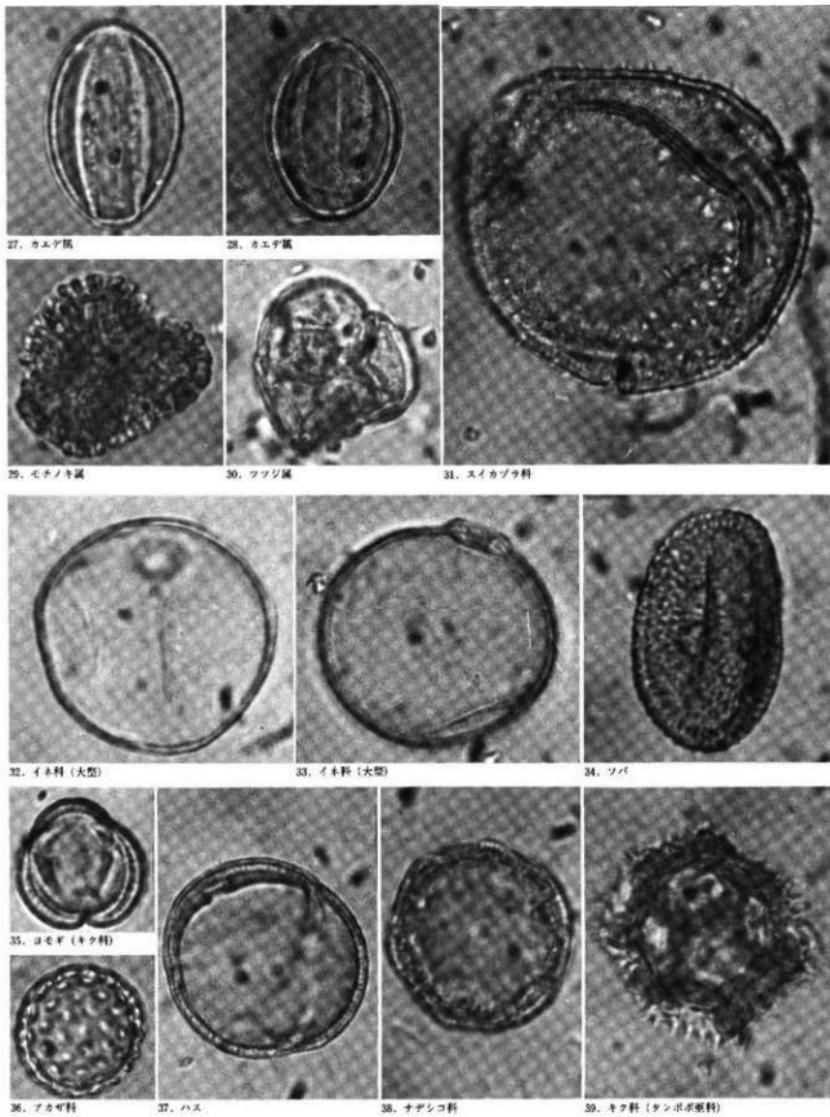


[1~4 × 500, 5~11 × 1000]

挿図5 花粉資料

[ $\times 1000$ ]

插図 6 花粉資料



[×1000]

挿図7 花粉資料

## 5. 三ノ丸跡出土木材の樹種

京都大学木材研究所

林 昭三  
島 地 謙

### 1. はじめに

高槻城三ノ丸跡の発掘調査で中世の溝2条と近世の外堀が検出された。溝1の東半分の南側には丸太杭が20本近く打ち込まれていた。また外堀では斜面部に径8cm前後の丸太杭が5~6段の杭列として多数(439本)検出され、ところによっては杭列に横木を差し渡して補強している。なお溝2からは木質造物は検出されなかった。これらのうち、溝1から杭材4点、外堀から杭材10点・横木6点、計20点を樹種同定の試料として採取した。杭材は数量が極めて多く、肉眼観察で明らかに同樹種と認められるものがあるので、代表的なものを選んだ。これらの試料から、木口、柵目、板目の3断面の切片をとり、永久プレパラートを作製して光学顕微鏡で観察し、樹種の同定をおこなった。

### 2. 樹種同定の結果

樹種同定の結果は表3に示したとおりである。

以下に樹種同定の根拠となった特徴を簡単に述べ、参考のために顕微鏡写真を付しておく(写真説明のカッコ内数字は試料番号)。

1. マツ(二葉松) *Pinus* sp. (マツ科)(試料番号6, 7, 9, 10, 18, 19)(写真1~3)

早・晩材の移行はやや急。水平・垂直樹脂道がある。放射仮道管の内壁に鋸歯状の突起がある。

2. スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科)(試料番号5, 8, 12, 14)(写真4~4)

晩材に樹脂細胞が点在し、やや接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、分野壁孔はスギ型。垂直・水平樹脂道および放射仮道管はない。

3. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. (ヒノキ科)(試料番号15, 16, 17)(写真7~9)

晩材に樹脂細胞が点在し、やや接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、分野壁孔はヒノキ型。垂直・水平樹脂道および放射仮道管はない。

4. ハンノキ *Ahnus japonica* Steudel (カバノキ科)(試料番号1, 4)(写真10~12)

散孔材で道管は小さく、数個が放射方向に複合する。道管の穿孔は階段穿孔。放射組織は單

遺構名	遺物名	試料番号	樹種名
溝 1 (中世)	杭材	1	ハンノキ
		2	クリ
		3	クリ
		4	ハンノキ
外堀 (近世)	杭材	5	スギ
		6	マツ(二葉松)
		7	マツ(二葉松)
		8	スギ
		9	マツ(二葉松)
		10	マツ(二葉松)
		11	ヤマザクラ
		12	スギ
		13	クリ
		14	スギ
	横木	15	ヒノキ
		16	ヒノキ
		17	ヒノキ
		18	マツ(二葉松)
		19	マツ(二葉松)
		20	エノキ

表3 樹種同定一覧表(三ノ丸跡出土木材)

列同性で、集合放射組織がある。

5. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (ブナ科) (試料番号2, 3, 13) (写真13~15)

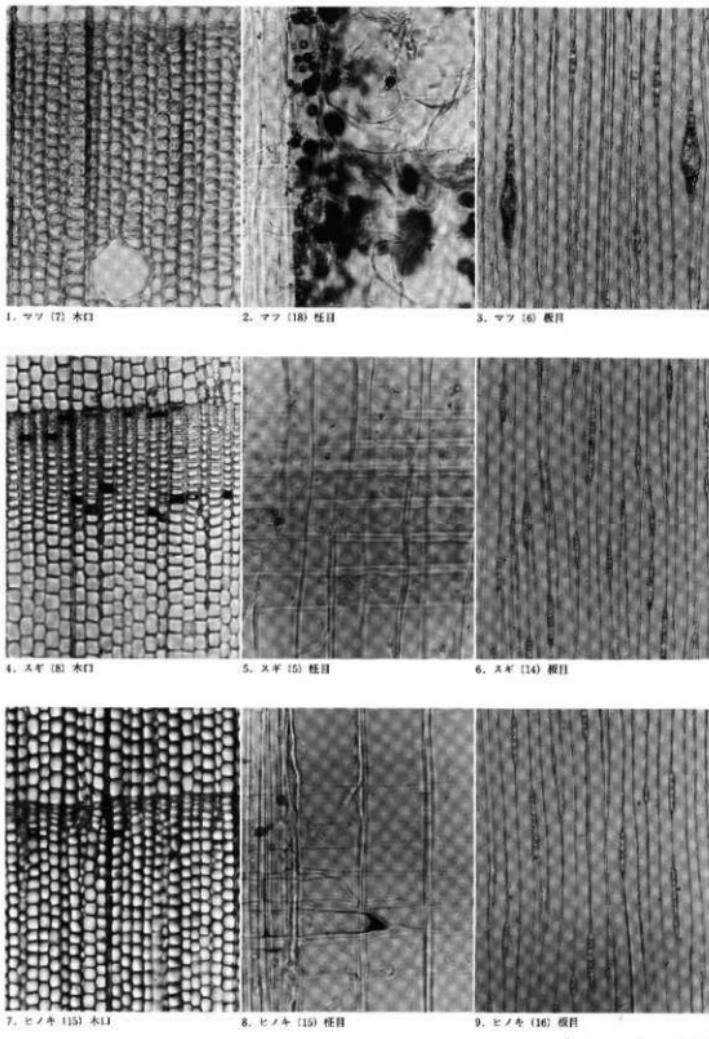
環孔材。年輪の始めに極めて大きい道管が1~3列にならび、そこから順次径を減じてゆき、晩材部では薄壁で角ばった小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は單穿孔。放射組織はすべて単列同性。

6. エノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai (ニレ科) (試料番号20) (写真16~18)

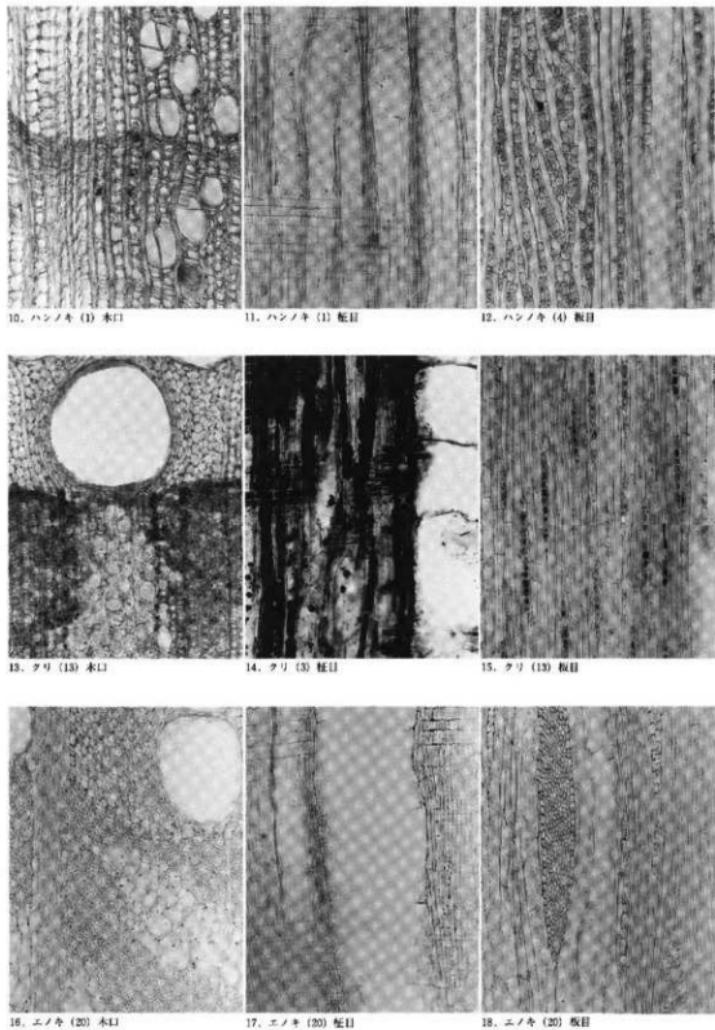
環孔材。孔圈の道管はやや大きく、孔圈外の小道管は集合していわゆる花綵(はなづな)状となる。道管の穿孔は單穿孔で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で、1~2細胞幅のものと8~15細胞幅のものがあり、幅の広い放射組織には鞘細胞が認められる。

7. ヤマザクラ *Prunus sargentii* Rehd. subsp. *jamasakura* Ohwi (バラ科) (試料番号11) (写真19~21)

散孔材。やや小さい道管が単独あるいは放射方向ないし斜線状に複合して平等に分布するが、年輪の内境に沿ってやや密度が高い。道管は單穿孔でらせん肥厚をもつ。放射組織は同性ないしやや異性、1~4細胞幅でありサクラ属の中では狭い。

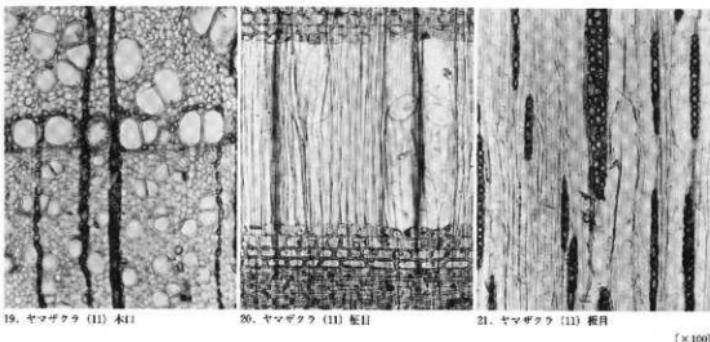


挿図 8 木材の樹種



挿図9 木材の樹種

[×100]



挿図 10 木材の樹種

### 3. むすび

出土したすべての材から試料を採取していないので、樹種の出現頻度については結論を導くことはできない。しかし同定した結果からある程度の推論はできる。溝1からはハンノキ2点、クリ2点と広葉樹のみが検出された。約20点のなかの4点を同定したのみであるが、これら両樹種とも本丸跡の調査（高槻市文化財調査報告書第14冊『抵津高槻城』昭和59年3月）では見られなかった樹種である。針葉樹は1種も認められなかった。

外堀の杭材ではマツ（二葉松、前回調査ではクロマツではないかと類推した）4点、スギ4点と圧倒的に針葉樹が多く、広葉樹としてはクリ1点、ヤマザクラ1点が検出されたのみである。ヤマザクラも今回新しく同定された樹種である。外堀の横木ではヒノキ3点、マツ2点と針葉樹が多く、広葉樹はエノキの1点のみであった。ヒノキには建築材としての加工痕があることから転用材であることが判るが、本丸の石垣構築には用いられていない樹種である。なおエノキも今回新しく同定された樹種である。

マツのみが今回も前回同様に最大頻度で検出された。しかしマツ以外の樹種がすべて本丸跡の調査の結果と異なっていたことや、前回は日本の代表的樹種であるスギやヒノキが検出されなかったのに、今回はこれらが認められたことは極めて興味のあることである。構築された年代が溝1では中世、本丸や外堀が近世という差異があるが、同じ近世でも時期がずれていることも容易に想像される。また資材調達の場所や時期にも相違のあることも考えられるが、いずれにしても高槻の近辺に生育していた樹種であり、とくに杭のためとか横木用として樹種を選択したことはないようである。

## 6. 三ノ丸跡出土の金属製品およびガラスの材質分析

奈良教育大学

三辻利一

高櫻城三ノ丸跡出土のキセル、古銭およびガラスの素材が何であるかを調べるために、蛍光X線分析をおこなった。

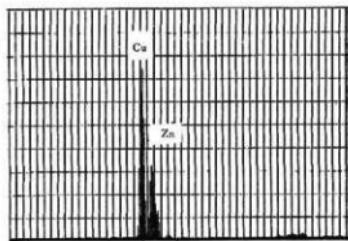
ピークの同定には成分既知の古代コイン中のCu, Ag, SnのK $\alpha$ , K $\beta$ 線を使って作製したエネルギー較正曲線により、資料中の含有元素を同定した。含有元素の確認にはK $\alpha$ , K $\beta$ またはL $\alpha$ , L $\beta$ , LYの共存によりおこなった。つぎに、全資料の分析結果をまとめておく。

### No. 1 キセルの雁首（図版第31b-2）

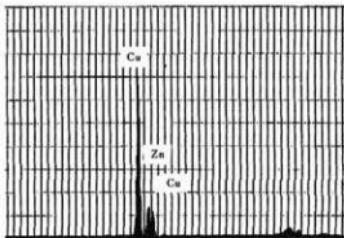
主成分はCuとZnであり、素材は真ちゅうであることがわかった。不純物として、ごく少量のSnを含むことがわかった。

### No. 2 キセルの吸い口（図版第31b-3）

主成分はCuとZnであり、雁首に比べてZnが少ない。素材は真ちゅうである。同じく不純物として、ごく少量のSnを含むことがわかった。



No.1 キセルの雁首



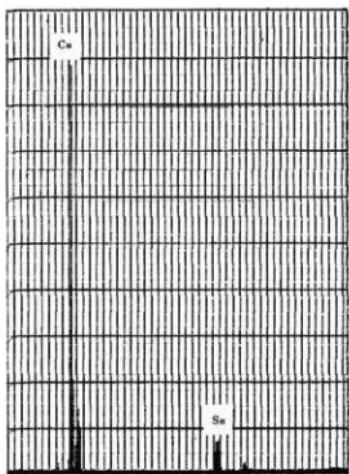
No.2 キセルの吸い口

挿図11 蛍光X線スペクトル

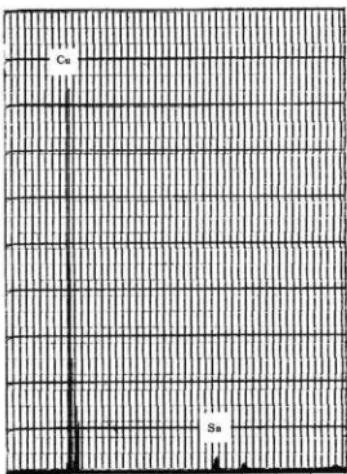
### No. 3 キセルの吸い口（図版第31b-5）

主成分はCuであり、少量のSnを含む。この点で青銅といえる。Pb, Ag, Sbのピークは観測されなかった。

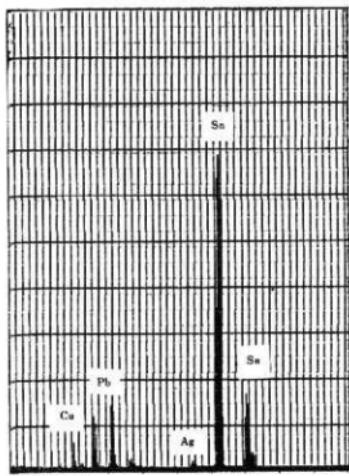
### No. 4 キセルの吸い口（図版第31b-4）



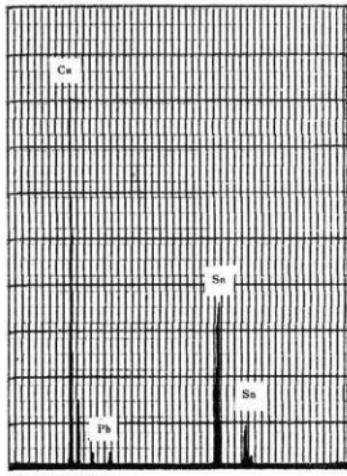
No.3 キセルの弱い口



No.4 キセルの弱い口

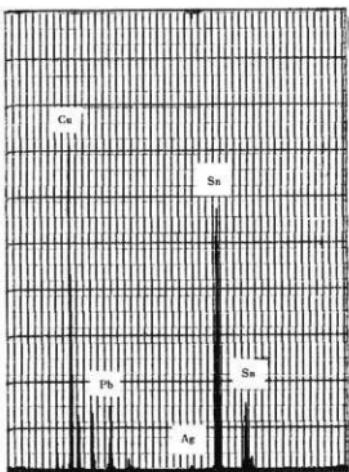


No.5 銀(不純)

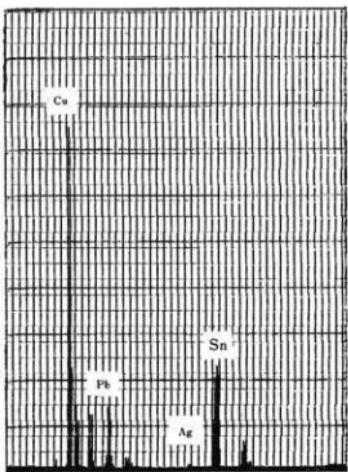


No.6 銀(真水通室)

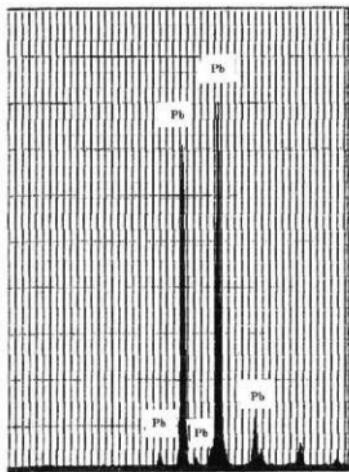
挿図12 蛍光X線スペクトル



No.7 銀(平成元宝)

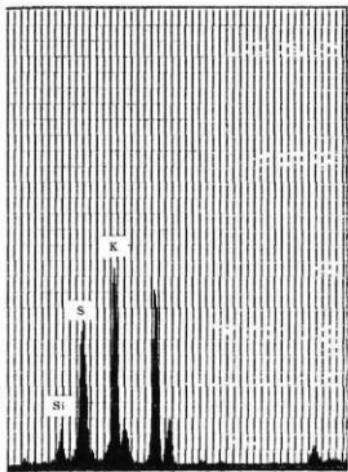


No.8 銀(寛永通宝)



No.9 ガラス

Moターゲット



No.10 ガラス

Tiターゲット

挿図13 荧光X線スペクトル

Cu を主成分とし、少量の Sn を含む青銅である。主成分組成、および不純物からみて、No. 4 は No. 3 と同じ材質である。

No. 5 銭〔不詳〕(図版第31b-9)

資料の表面は Sn を主成分とし、Pbを少量含む。Cu のピークは小さい。この理由は、この資料の腐食が著しく表面の Cu が流出したためとみられる。本体は青銅であろう。他に Ag を不純物として含むが、Sbは含まない。

No. 6 銭〔寛永通宝〕(図版第31b-6)

Cu, Sn, Pb を三主成分とする。典型的な古代型組成をもつ青銅錢である。このように一定した組成は古錢永錢にみられる。

No. 7 銭〔至道元宝〕(図版31b-8)

Cu, Sn, Pb を三主成分とする。典型的な古代型組成をもつ青銅錢である。

No. 8 銭〔寛永通宝〕(図版第31b-7)

Cu, Sn, Pb を三主成分とする青銅錢である。Cu に対する Sn, Pb のピークの高さの比は No. 6 とは異なり、同じ寛永通宝でも、鋳造地、鋳造年月が No. 6 とは違うとみられる。

No. 9 色ガラス(図版第17a-15)

No. Ti ターゲットによるスペクトルを示す。Mo ターゲットによるスペクトルでは Pb のみが観測された。また、Ti ターゲットによるスペクトルでは、Si, S, K の 3 元素が確認された。紫がかった着色は PbS によるものと思われる。

## 第3章 まとめ

今回の三ノ丸跡の調査で検出した遺構・遺物について、検討してみたい。

### 1. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、中世高櫻城の堀とかんがえられる溝や近世高櫻城の外堀・工兵隊の造成工事跡などで、それぞれの遺構単位がおおきく、しかも各時期の掘り込みが大規模なため、該期の遺構の損壊率がたかく、遺構の把握がやや難解であった。図版第41は時期別に遺構をしるすとともに、当該期での被破壊面をしめたものである。

I期（中世1）では、後世の掘削によってほとんどの遺構面が削平されており、削りこされた溝1と溝1南辺の西半分にわずかにみられる遺構面のみの検出である。

II期（中世2）でも、I期と同様に近世・近代の掘り込みで削平されている。溝2も西半分は掘方上端が検出されたが、東半分は深く削られている。

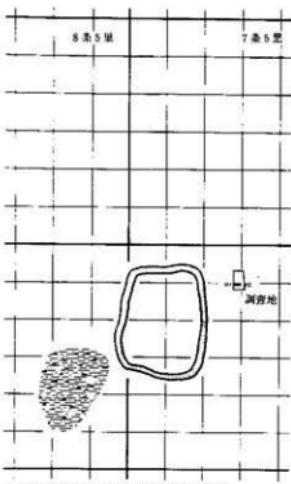
III期（近世）では、三ノ丸東北部の外堀と郭面を調査したが、外堀の肩部上端と郭面の大半は近代の掘り込みによって削平されている。

IV期（近代）では、削平面・井戸・落ち込み・暗渠を調査した。当該期は第一中学校の便槽による掘り込み程度で、大きな削平はない。

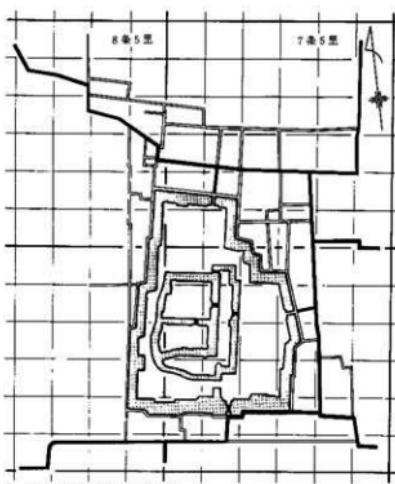
以下個々の遺構について、まとめるることにする。

中世の溝1は東西方向に検出したが、復元すると長さ22m・幅3mにちかい規模をもち、しかも2ヶ所に土坡状の掘り込みを付した特異な筋掘りの溝である。このような形状をしめす遺構は寡聞にして知らないが、単なる筋掘りの溝であれば大内氏館跡に類例がある。そこでは館内を区画する機能をもつとかんがえられている。ところで溝1の場合、南岸のみに杭列（横列）を有することからすると、区画する機能以上に内外を区分することの意味合いが大きいとおもわれる。そうしたとき杭列のある溝の南側一帯が内側として区分されるのであろう。ちなみに杭材はハンノキ・クリと鑑定され、昭和50年の近世高櫻城本丸跡の石垣基礎（胴木組）の調査で大量に検出した木材のなかにはまったくみられなかったものである。

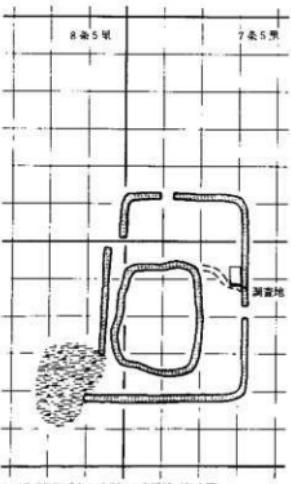
溝1の時期は備前焼のV期前半の播鉢片や土師皿から、おおむね16世紀後半とかんがえられる。この時期の高櫻城では、永禄十二年（1569）にそれまでの入江氏にかわって和田惟政が入城、その後の天正元年（1573）には惟政の子惟長が高山飛驒守とその子右近によって滅ぼされるという政変劇がおこっている。ルイス・フロイスの書簡や『兼見御記』には、この政変劇に



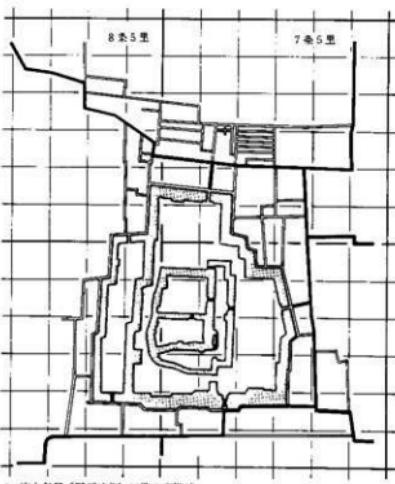
1. 永祥年間〔和田時代〕の高麗城（想定図）



3. 元和年間〔土岐時代〕の高麗城



2. 天正年間〔豊臣時代〕の高麗城（想定図）



4. 寛永年間〔岡部時代〕以降の高麗城

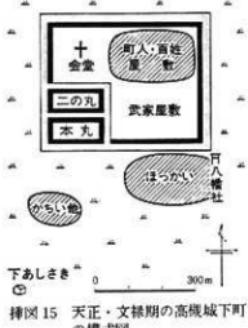
0 500m

挿図 14 高麗城変遷図

際して高櫻城が炎上したと伝えている。溝1出土の石仏が火をうけていたことなどは、高櫻城炎上を彷彿とさせるものがある。また後述するように次期に掘削された溝2が、高山右近時代の遺構であることからしても、溝1が和田氏時代の高櫻城の遺構である可能性は高いといえる。そして溝1が城地を画する一種の堀とかんがえられるならば、調査区域外の延長上に不連続線状に掘削されているものと推定され、途切れている部分については出入り口になるのであろう。挿図14-1は永禄期（和田時代）の高櫻城の平面規模想定図に、溝1をはじめあわせたものである。この溝1の検出によって、以前に「高櫻城絵図」で想定した永禄期の高櫻城（堀の囲郭部分）を上まわる規模となることがあきらかになったが、同時に条里線に沿うかたちで堀割がなされていたことも確かめられた。

溝2は幅7~8m・深さ1.5mの東西方向の大規模な溝（堀）で、調査区の西端では北側に屈曲し、また東端でも南側へ曲がるか一旦途切れるとかんがえられる。いざれにしても東西方向に鉤の手となって延びる堀割として復元されるものである。出土遺物はすくなく、最新のものでは16世紀代の中国製の白磁端反皿片が検出された程度である。ところが当該遺構の時期をしめすものとして、埋土の状況が大いに参考となった。詳しくは遺構の項にゆずるが、近世高櫻城の三ノ丸造成時（元和三年）に一気に埋め立てられたことが判明している。要するに溝2は元和三年まで機能していたのであり、中世高櫻城の最末期の遺構とすることができる所以ある。

さきに、天正元年の高櫻城炎上を記したが、その壊滅ぶりは「(炎上のため)城には門の上に在る稜堡二ヶ所及び小塔一ヶ所の外存せず」<ルイス・フロイス「書簡」>とあり、相当なものであったことがわかる。その後、天正六年に荒木村重にくみした高山右近が、まさに信長に攻められようとしたが、「(高櫻城が)水の充ちたる広大な堀と周囲の城壁に依り陥ること能わざる」<ジョアン・フランシスコ「那蘇会士日本通信」>であったという。すなわち高山右近が天正六年までに高櫻城を再建していたことになるのである。しかも右近の高櫻城は城内に教会や町屋を含む惣構の構造をもつものと推定され、そのことは城下の小字の検討からも具体的に追究されている。そしてこの形態・規模は右近転封後も引き続き保持され、元和元年に南外郭に幕府の二万石蔵が設置された以外は、元和三年の修築時まで大きな変化はみられない。今回の調査区がこの惣構のなかでどのような位置をしめるかについては、挿図14-2にしめしている。



挿図15 天正・文禄期の高櫻城下町の模式図

また溝2の機能については、小字を検討された小林健太郎氏作成の挿図15が重要である。溝2はまさに町人・百姓の居住域の南辺に位置することがかんがえられ、武家屋敷域との境を見事に画しているのが見て取れよう。

近世では絵図に描かれた高槻城三ノ丸の一画が初めてあきらかにされたことに加え、その東北隅部が確定でき、今後の城地の復元において大きな手掛かりが得られた。ただ近代の削平のために、土居・築地堀・武家屋敷などが調査できなかったのが惜しまれる。外堀の調査では杭列と横木からなる護岸施設を検出した。そして遺構・遺物の検証からすると元和修築時のものではなく、江戸時代中頃の施工とおもわれ、しかも築地堀の改修工事までも含めたものであった。護岸工事に用いられた杭材や横木材は、マツ・スギ・ヒノキなどの針葉樹が圧倒的に多いが、スギ・ヒノキは本丸跡の調査でも検出しておらず、この点でも外堀の護岸工事が後世の仕業であるといいうるであろう。

また北堀の杭列のしめす方向性（図版第2の破線）は、これまでの地形図や航空写真から復元した外堀の方向（同じく実線）とは約5度のひらきがみとめられた。今回検出した杭列は長さ23mにわたるとはいえ、遺構の巨大さから比べれば微々たるものであり、どちらが実際にちかいものかは今後の西側の調査をまちたいとおもう。なお外堀の調査では、花粉分析資料を探取し、その鑑定報告文を別稿に掲げている。厚く堆積した安定的なヘドロ層から資料を得たからか、高槻城下の景観の変貌ぶりがよくしめされている。

## 2. 遺 物

遺構からはあまりまとまったものは検出しておらず、むしろ整地層から多種多様なものが出土している。以下、主なものについて2、3気付いたことを記し、後日にそなえたい。

陶磁器では、唐津・伊万里・京焼・楽・瀬戸・美濃・信楽・丹波・備前・堺（播鉢）・外国産（中国・安南）などの碗・皿・鉢などを主体として、そのほか壺・徳利のようなものがわずかにみられる。時期的には13世紀から19世紀におよんでいる。

このうち13世紀～15世紀では中国製の青磁碗の小片ぐらいで、ほとんどまぎれこみに等しいものである。16世紀代のものは中世高槻城の遺物で、若干の中国製陶磁器のほか唐津・瀬戸・美濃・備前・信楽・丹波などの皿・播鉢類がいくらかみられる。そしてあとの大半の遺物が近世高槻城のものである。

近世の遺物は現在まだすべてのものに目を通していないので、数値などの比率的なことはい

えないが、おおよそのことは把握できたとかんがえている。個々については本文にゆずるとして、まず遺物量としては肥前陶磁（唐津・伊万里）が圧倒的に多く、瀬戸のものが意外とすぐなかつた点があげられる。また肥前陶磁でも江戸時代をとおしてみると、時期によって出土量に多寡があり、17世紀後半がもっと多くて6～7割がこの時期に集中している。これに18世紀前半のものを加えると9割をこすのは確実である。そこで17世紀後半の肥前陶磁の種類をみると、唐津では灰釉陶の皿・碗、三島手の皿・碗・鉢、刷毛目装飾の碗・鉢、陶胎染付の碗、京焼風陶器の皿・碗があり、伊万里では染付の皿・碗・鉢、青磁染付の鉢、青磁の大皿、白磁の碗・ぐい呑・小壺、色絵の皿・碗・鉢などがあり、単に量的なものだけでなく、かなりのバラエティがみとめられる。これに対して、瀬戸は点数も少ないが、器種も馬目皿・大碗・大盤、志野の鉢などの類で、小物の碗・皿類はほとんどみられない。さらに肥前陶磁の出土量に対する瀬戸の割合はおそらく数パーセントにとどまるとかんがえられる。このことを他の事例と対比さすには、山城乙訓の勝竜寺城（長岡市）の堀跡（SD16305）の資料が最適とおもわれる。SD16305の埋土は大略 A・B・C の3層に分けられ、おおよそ C が16世紀後葉～17世紀前葉、B が17世紀前半、A が17世紀後半を主体として一部18世紀代のものが含まれる。比較するのは A 期で、対象となる瀬戸は32点、唐津は38点、伊万里は35点出土している。肥前陶磁（唐津+伊万里）に対する瀬戸の割合は43.8パーセントにもなり、高槻城の資料とでは雲泥の差となる。たかだか三ノ丸の一調査区の検討で結論的なことをいうのは危険かもしれないが、17世紀後半というのには、永井直清がさきの勝竜寺城から高槻城へ入部（慶安二年：1649）してきた直後で、以後200年間の高槻城の土台づくりの時期にあたり、武家屋敷（とくに三ノ丸）がもっとも整備されたときとかんがえられる。したがって多くの物資が持ち込まれたとおもわれ、この時期に肥前陶磁の大量買い付けがおこなわれたと言えなくもない。陶磁器の大半が近代の整地層から出土したにもかかわらず、その6～7割が17世紀後半の肥前陶磁であったことは、そのことを示唆するし、それらが幕末まで大切に使われていたことも、多くの焼接ぎ資料が傍証するところであろう。

土師質土器では、焼塩壺について少しみてみたい。今回出土したのは2点（うち1点は口縁部片）で、どちらも A 類である。6（図版第13）は全体の三分の一ちかくが遺存しており、体部中位には長方形の枠内に二行八文字の刻印がうたれている。刻印は薄いが、右上端が「御」、左下端が「織」と確實に読み取ることができる。これまでの研究によると、この刻印は右行が「御壺塩師」、左行が「堺湊伊織」と復元される。渡辺誠氏によれば、この種の刻印は、一枚の粘土板による板づくりの B 類の刻印とされているもので、A 類の焼塩壺にはみられないものであるという。A 類にみられる刻印は「ミなど・藤左衛門」、「天下一堺ミなど・藤左衛門」、

「天下一御壺塩師・堺見なと伊織」の三種類であり、「御壺塩師・堺塗伊織」は「天下一」の使用が禁止された天和二年（1682）九月以降で、それとともに焼塩壺の形態も変化したとされている。

本焼塩壺の場合は形態が古くて、刻印が新しいことになり、いわゆる過渡期のものとかんがえられる。そこで想像たくましく解釈すれば、焼塩壺の製作工房に「御壺塩師・堺塗伊織」印が届いたものの、すぐには製作法が更新されず、旧来の焼塩壺に新印を押したものとおもわれる。その意味では希有品といえ、製作時期も天和二年の九月直後で、おそらくその年内であつただろう。

つぎに高島硯とその記銘についてみてみたい。いわゆる高島硯は滋賀県高島郡内の阿弥陀山で産出する粘板岩でつくられた硯で、古来より名硯として珍重されてきた。その材質・色調により、玄昌石と虎斑石の別がある。高島硯の始まりは、地元の伝承によると天正年間といわれている。ところが最近中・近世遺跡の発掘調査が頻繁となり、高島硯がしばしば検出されるようになってきた。

大阪府西ノ辻遺跡では「(天)福二年甲午」(1234)の年号のある高島硯が発見され、伝承を一気に350年もさかのぼることになり話題となたし。管見では東奈良遺跡においても平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての高島硯が出土している。<sup>9</sup>また堺環濠都市遺跡でも中世末から江戸時代初期にかなりの点数がみられ、江戸時代後半のものも出土している。<sup>10</sup>江戸時代後半から幕末にかけての資料では、水野正好氏の集成がある。現在のところ編年研究にまではいたらないが、今後の研究課題のひとつになるものであろう。

さて高槻城出土の高島硯は下面に内削りのないa類と内削りのあるb類とに分かれることはすでに述べたが、上記の資料を一覧したところでは、江戸時代中頃を境として、それ以前にはa類が、以後にb類がみられるようである。そしてb類には、「高島」・「高島石」・「本高島」などの産地名を刻むものがおく、堺環濠都市遺跡の資料や水野氏の集成資料もその例にもれない。水野氏はこの「内削り」と「高島」銘を高島硯の量産化に相關するものととらえている。したがって高槻城出土の資料（図版第32）も、a類が江戸時代の前半（古くても中世末）、b類が江戸時代の後半ということになる。

そこでa類の1（図版第33-a・b）に記された「□□村井之内 小泉姓」についてみてみたい。この記銘は「高島」の類とちがい、地名と名字を記したもので、所蔵者銘を刻したものである。「井之内」は字名とかんがえられるが、高槻城下や高槻市内には「井之内」と呼ばれるところはなく、もっともちかくでは長岡京市にある勝竜寺城の北側に井之内村がみられ、後述する「小泉姓」銘にからめて、関連があるのではないかとおもわれる。「小泉姓」については

17世紀後半の『高槻城絵図』武家屋敷配置図に記載のある小泉弥平次（三ノ丸）や小泉源七（出丸），もしくは慶安二年（1649）に永井直清が勝竜寺城から入部する際の『御供次第』（写）に記された小泉喜太夫・小泉左衛門・小泉七之介などが候補にあげられる。特定できないものの，これらいずれかの小泉氏がこの高島窯の所有者なのであろう。

最後に匣鉢と窯壁片に關注して，陶工永楽保全の名をあげておこう。保全は寛政七年（1795）に生まれたといわれ，13歳ごろ土風炉師である西村家の養子となり，十代了全のもとに陶器研究をはじめたもので，家督を継いだ文化十四年（1817）以降の善五郎時代に本格的な作陶生活に入っている。その間の文政十年（1827）には紀州徳川家の柳陰亭で御庭焼をおこない，永楽印を押領している。そして弘化三年（1846）頃に隠居，のち嘉永三年（1850）に江戸に赴き，嘉永四年（1851）には大津の円満院で湖南窯をひらいている。安政元年（1854）九月没。

高槻には，晩年にちかい嘉永五年（1852）の五月頃に訪れ，その年の十月までには大津にもどっていることから，五ヶ月間程度の滞在であったとおもわれる。窯は城内東北部に築かれたといわれているが，これまでその実態は不明であった。<sup>④</sup>今回の調査でも，窯本体はすでに削平されていて検出できなかったが，匣鉢と窯壁（とりわけトンバリ）の出土は，かつて『高槻窯』が三ノ丸の一画に存在していたことを充分証明するものである。ただ彼の作品を出土品の中から見いだすことはできなかった。また高槻窯の作品については，滴翠美術館などで所蔵されているが，高槻市内の伝世品はあまり知られていない。図版3・4に紹介した5点は，高槻城下の旧家に伝えられた作品で，参考までに掲載させていただいたものである。

#### ＜注＞

- ① 高槻市教育委員会 「摂津高槻城跡」一本丸跡発掘調査報告書一 昭和59年
- ②-③ 佐賀県立九州陶磁文化館 「国内出土の肥前陶磁」 昭和59年  
佐賀県立九州陶磁文化館 「窯ノ辻・ダンバギリ・長谷谷」 昭和59年
- 鈴木重治 「京都出土の伊万里産『清水』銘陶器をめぐって」 「考古学と移住・移動」 昭和60年  
及び鈴木重治氏の教示による。
- ④ 楽古左衛門氏の教示による。
- ⑤ 朝日新聞社 「古瀬戸と志野織部」 昭和53年
- ⑥ 能勢町教育委員会 「能勢町における埋藏文化財の調査！」 昭和60年
- ⑦ 横木修 「近世備前焼の変遷と年代観」 「占備前岡録（木村コレクション）』岡山市教育委員会 昭和59年
- ⑧ 森村健一氏の教示による。 繁伸一郎「堺環濠都市遺跡（SKT153）発掘調査概要」（財）大阪文化財センター『大阪府下埋藏文化財担当者研究会（第15回）資料』 昭和61年
- ⑨ 矢部良明『タイベトナムの陶磁』（陶磁大系47） 昭和53年
- ⑩-⑪ (財)古代学協会「平安京土御門烏丸内裏跡—左京・一条・坊九町—（平安京跡研究調査報告第10報）」昭和58年

- ⑬ 森田克行 「近世瓦成立の諸段階」『第2回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター 昭和59年
- ⑭ ⑬と同じ
- ⑮ 吉泉弘 「江戸の街の出土遺物」—その展望—『季刊考古学』第13号 昭和60年
- ⑯ 山口市教育委員会 「大内氏館跡Ⅳ」・「大内氏館跡V」 昭和57年・58年
- ⑰ 小林健太郎 「城下町高模の形成」『高槻市史』第二巻(本編Ⅱ)昭和59年
- ⑱ 岩崎誠他 「長岡京市文化財調査報告書」第17冊 長岡京市教育委員会 昭和61年
- ⑲ 渡辺誠 「焼塙」 「講座・日本技術の社会史」第二巻 昭和60年
- ⑳ 西口陽一 「人・役・石剣」 『考古学研究』第32巻第4号 昭和61年
- ㉑ 奥井哲秀氏の教示による。実見。
- ㉒ 森村健一氏の教示による。実見。
- ㉓ 水野正好 「江州高島産石硯資料管見録」 『滋賀考古学論叢』第2集 昭和60年
- ㉔ 船木佳代子 「大阪・奈良のやきもの」 『日本やきもの集成』7 昭和56年



# 図版





高明路（空中写真）

昭和51年



調査区及びその周辺（空中写真）

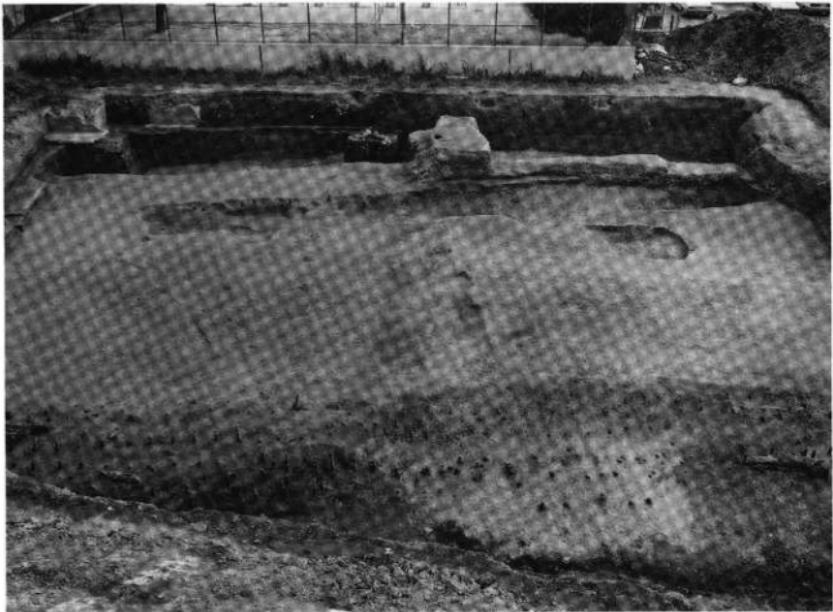
約1/400



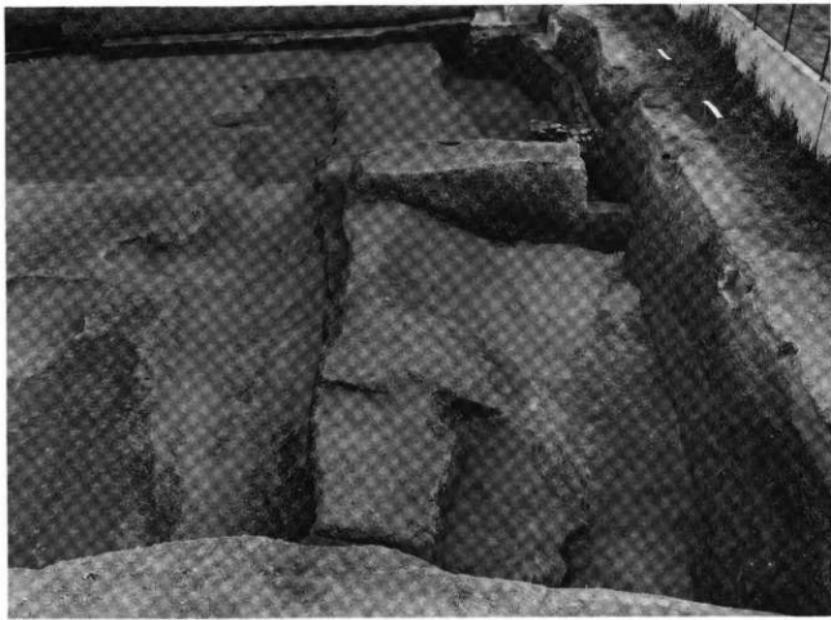
a. 調査区全景（西側から）



b. 調査区全景（南側から）



a. 調査区全景（北側から）



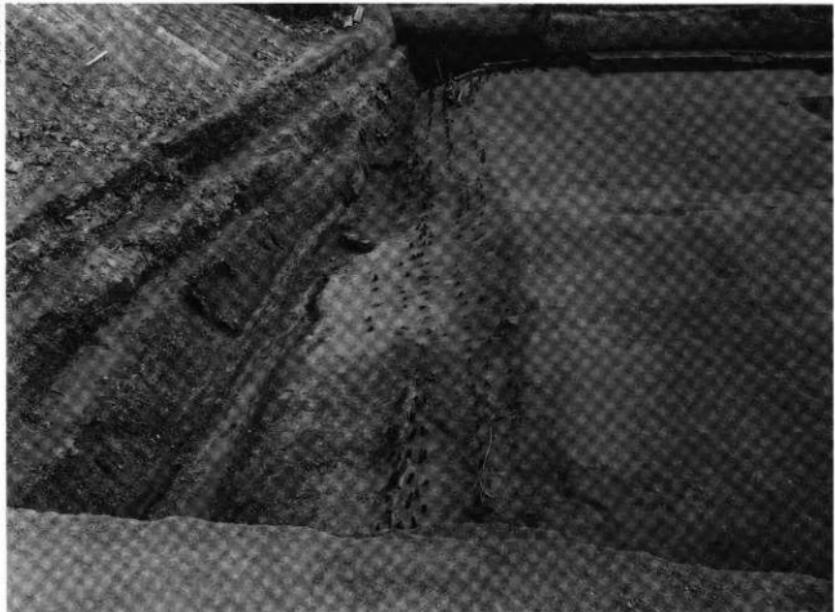
b. 溝1, 溝2（西側から）



a. 溝2堆土の状況 (A付近)



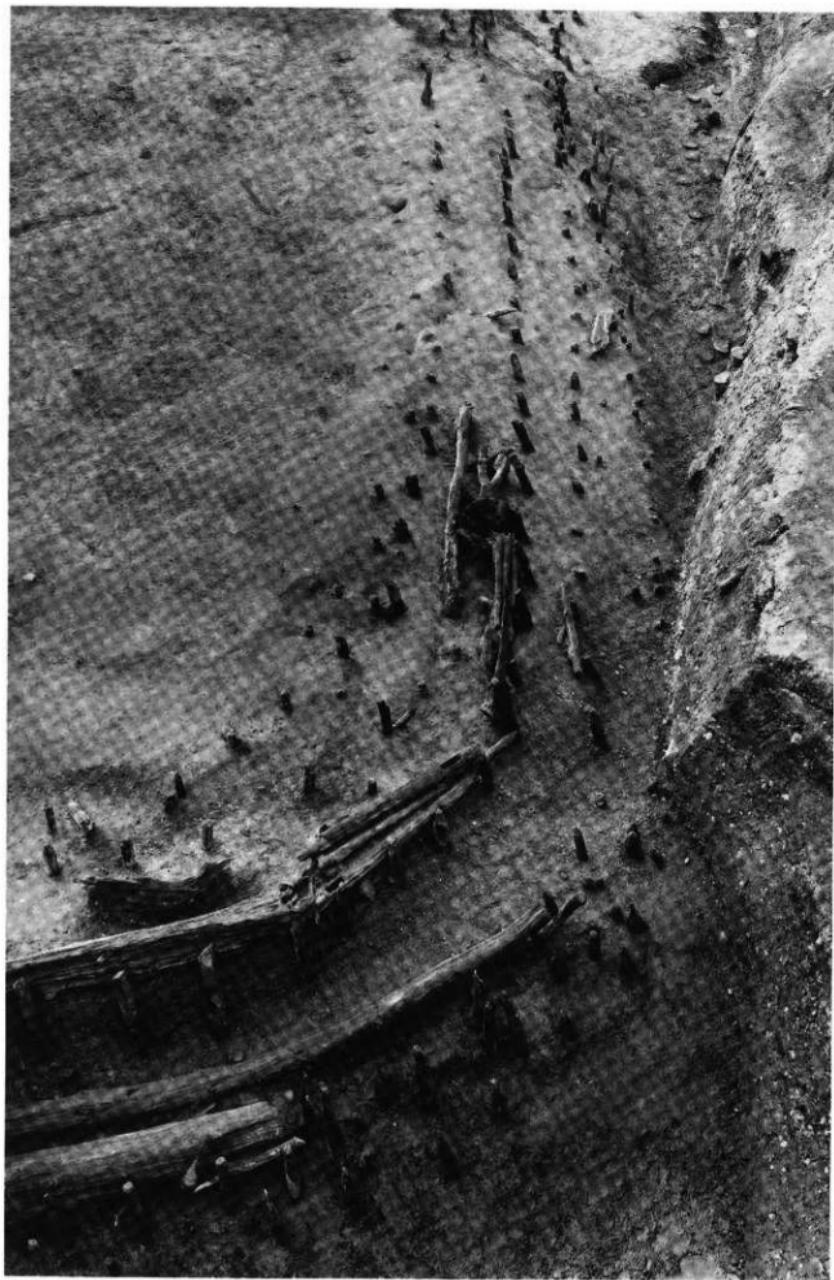
b. 同上 (B付近)



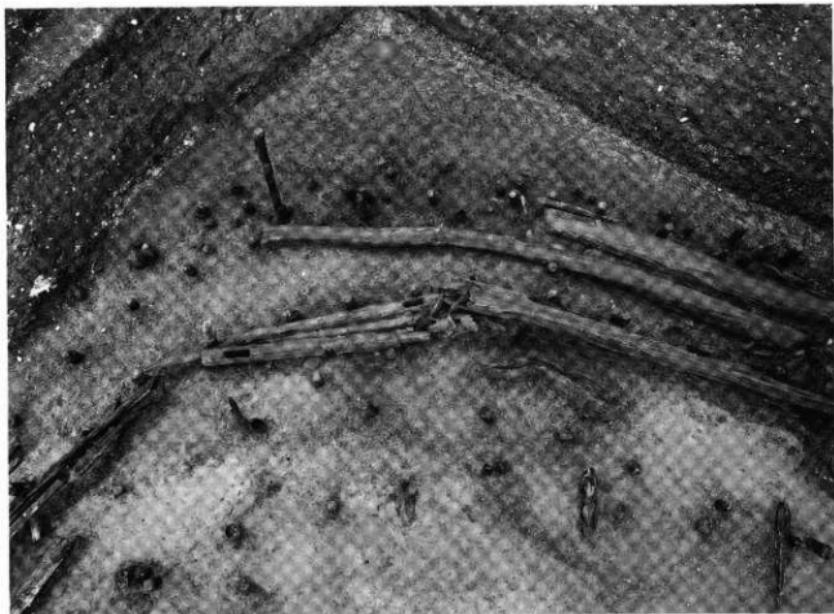
a. 北外堀及び杭列（西側から）



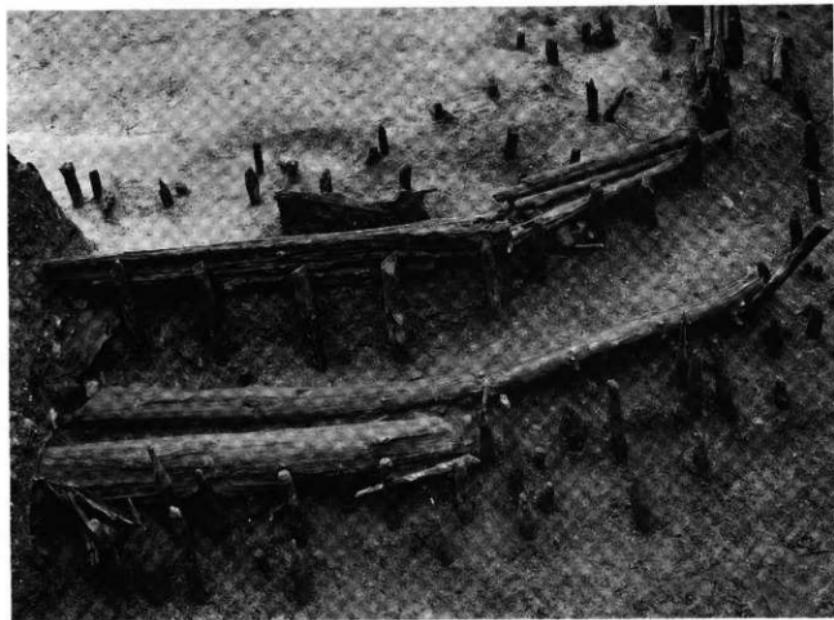
b. 外堀東北隅部（北西側から）



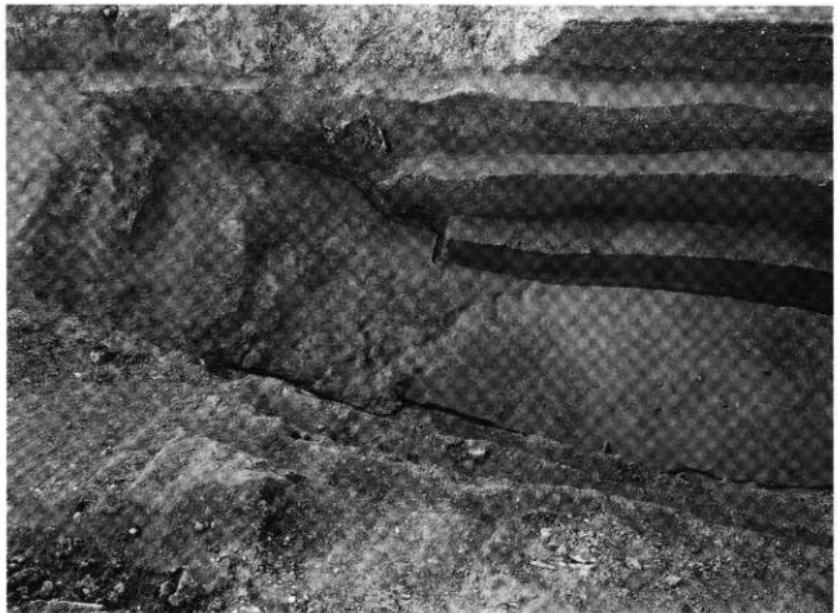
外側の護岸施設（東側から）



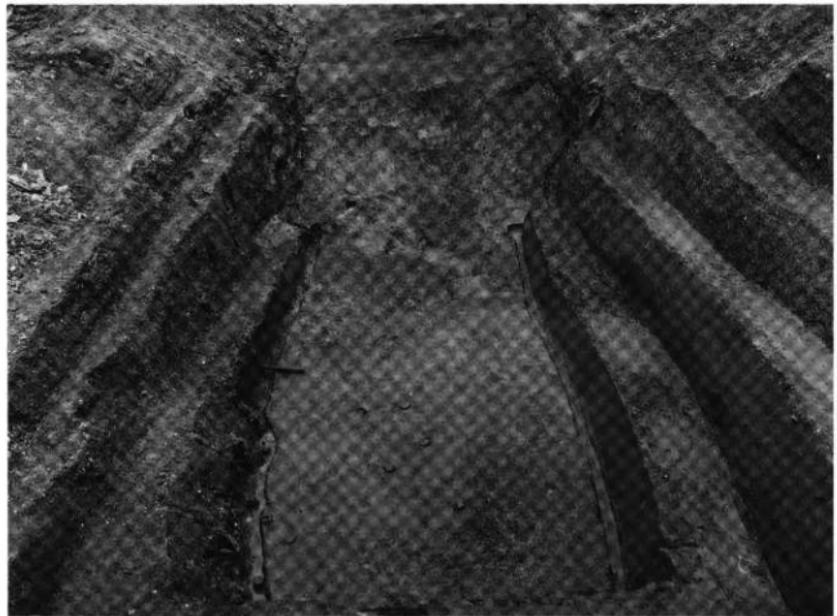
a. 東北隅部護岸施設（西上方から）



b. 同 上（東側から）



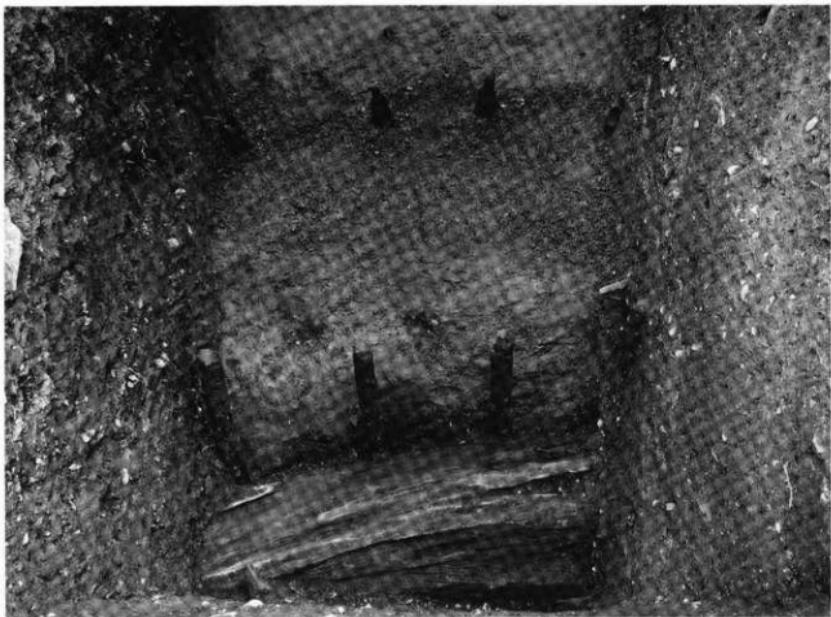
a. 外観（東側から）



b. 同上（北側から）



a. 東南拡張部（西側から）



b. 拡張部〔北部〕護岸施設（東上方から）